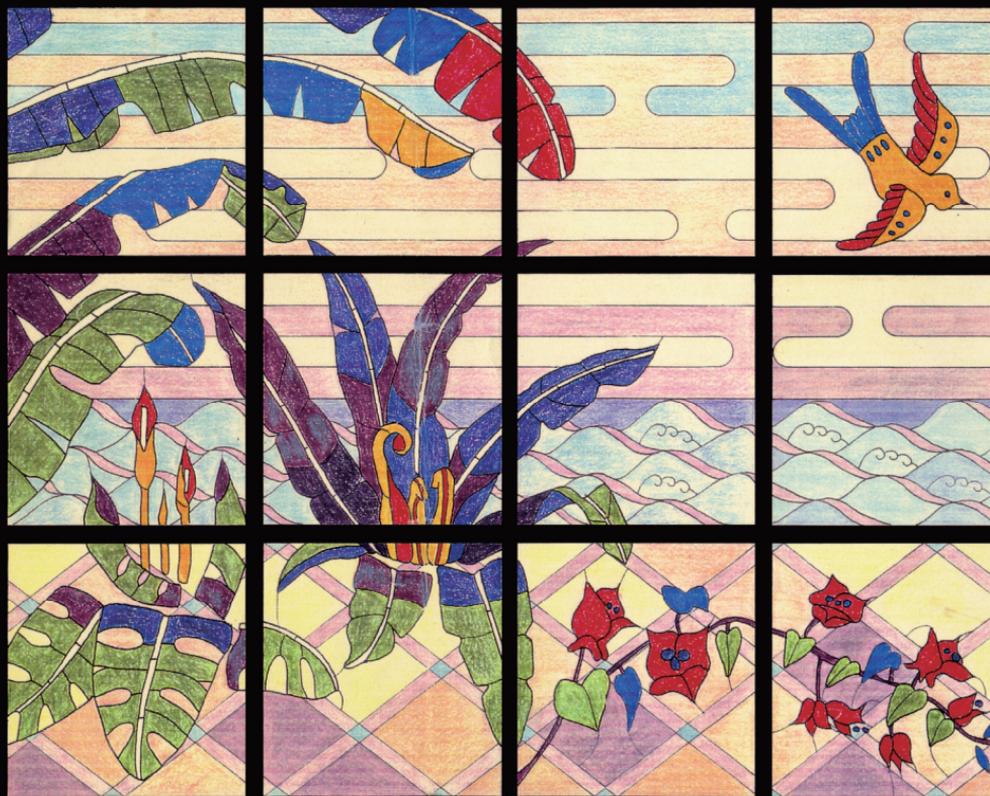


第2回名桜文学賞受賞作品集



第二回名桜文学賞受賞作品集

第二回名桜文学賞受賞作品集 目次

小説部門

- 最優秀賞 該当作なし
奨励賞 化生 凜藤 海 / 1
奨励賞 傘、舞い散る 瀬名波克弥 / 33

詩部門

- 最優秀賞 陽炎の意志 田中 直次 / 53
奨励賞 真夜中のブルーライト、冷めた空白 浅瀬 小夜 / 58
奨励賞 寝台あるいは墓地 神戸 要人 / 61
奨励賞 スプリント 荒井 青 / 64
奨励賞 いまのまに 宮太 星治 / 66
奨励賞 ありのまま 富里 千紗 / 69

短歌部門

- 最優秀賞 ジョバンニ 前原 真弓 / 73
奨励賞 シン・ママ 外田 さし / 74
奨励賞 岸を境に 安 堂 / 75
奨励賞 蟲毒 葬 ヤメ / 76
奨励賞 庭に水景物のあるレストラン 奥間 空 / 77
奨励賞 傘寿の友へ 本村 隆信 / 79

エッセイ部門

- 最優秀賞 おきあがりこぼし 堤 博美 / 81

俳句部門

奨励賞 演奏会と音楽葬
 一日三食
 森山 高史／87
 山田 太郎／91

最優秀賞 該当作なし

奨励賞 小鳥来る
 本村 隆信／97

奨励賞 男子の目
 外田 さし／98

奨励賞 十七歳夏俳句
 福井 聖来／99

琉歌部門

最優秀賞 該当作なし
 奨励賞 該当作なし

選評

小嶋 洋輔 小説部門 エッセイ部門／101

玉代勢 章 小説部門／108

あずさゆみ 小説部門／112

西原 裕美 詩部門／115
 エッセイ部門・詩部門・短歌部門／118

吉川 安一 エッセイ部門・詩部門・短歌部門／118

屋良健一郎 短歌部門／121

おおしる建 俳句部門／126
 エッセイ部門／129

小番 達 エッセイ部門／129

波照間 永吉 琉歌部門／132

照屋 理 琉歌部門／134

※巻末に募集ポスターを掲載

表紙

『あけの海』

原画 デザイン
ステンドグラス製作
帆足デザイン研究所
沖縄ステンドグラス



小説部門

奨励賞

化生
傘、舞い散る

凜藤 海／1
瀬名波克弥／33



小説部門

奨励賞

化生

凜藤 海

ガチャン、と皿が割れる音がした。続いて、何を言っているか分からない喚き声が聞こえる。この声が聞こえる度、驚く前に体が跳ねる。反射というやつなのだろう。最近では驚きすらしなくなつたが、体にはそう反応することが刻まれている。

支離滅裂な内容を叫ぶ怒鳴り声。心が圧迫されるような不快感には、悲しいかな慣れてしまった。それよりも負荷が来るのは、心の柔らかい部分を刺すように響く声だった。

「もうやめて！ お願い許して、」

あ、と思いつながら、それでも固まる体は耳をふさぐことすら許さない。

「どうしてこんなことするの……！」

零れるように発された悲痛な叫びが相手に届いたことは、今まで一度もない。

お母さん、多分泣いてるだろうな。見ずとも声で分かる。しかしそれを掻き消すかのように、

一層怒鳴り声は増した。ヒステリックは女の方だなんて言った人は誰だろうか。

喧嘩の仲裁はお母さんに止められている。私が入ったら余計お母さんが取り乱してしまうから。つまり私は、傍観することしか出来ない。

もどかしくて、背中が痒いとすら思う。

また何かが壊れる音がした。これは陶器っぽいやけど音が籠ってる気がする、マグカップとかかな。そう思いながら、ふと意識が遠ざかり、安全圏の部屋で私は眠りに落ちた。

次に目が覚めると、もう怒鳴り声はなかった。時計を見ると、寝ていたのは二時間ほどのようだ。そつと部屋を出ると、微かに箒で掃く音が聞こえる。台所に向かうと、予想通りお母さんが掃除をしていた。最終的にいくつ何が壊れたか、なんて知りたくはない。

「……蓄、起きてたの」

弱々しい声で、お母さんがそう言った。

「ううん、ずつと寝てたけど目が覚めたの」

「そう。……嫌になるよね」

その言葉が指すのが、目が覚めることではないことは、火を見るよりも明らかだ。お母さんだつて、あれだけ騒がしくてその間ずつと寝ていたわけではないことは分かっている。

だからこれは、私とお母さんはちゃんと繋がっていると確認する儀式のようなものだ。たとえ私がもう大学生で二十歳の誕生日が近くても、必要なもの。

「怪我はない？」

「大丈夫よ。それより、……」

お母さんが視線を向けた先には、食器棚がある。そこには、いつも定位置にあるはずのマグカップが無かった。お母さんがおばあちゃんからもらったもので、大事に使っていたもの。細かい花柄を気に入っていた。

「……悲しいね」

そう言うのと数秒置いて、そうだねと返ってきた。私には計り知れない悲しみが、海のように迫る。「今度、新しいのを買ってくるよ。最近雑貨屋で可愛いもの見つけたんだ」

優しく、明るく。そう意識しながら声を作り、傷つけないようにそう話しかけた。

「……そう、楽しみ」

明日にでも買って来なきゃ、と思いながら、箸を貰い細かい破片を拾って、新聞紙に包む。ゴミ箱に捨てると、笑って言う。

「大丈夫だよ、お母さん。お父さんが暴れるのは、お酒のせいなんですよ？」

「……うん、そうよ」

はつとし、少し逡巡してお母さんは答えた。それが分かっていたら、私達は大丈夫だ。

「そうだよ。じゃあ今日はもう寝よっか」

そうすると、少しほつとしたようにお母さんは微笑んだ。部屋まで送り届け、私も部屋に戻る。私はお母さんの味方だ。今までも、これからも。

そう心の中で確認した。

授業を受けながら、見たこともないマグカップを探しに行く算段を立てる。雑貨屋、と言ってもそう詳しい訳じゃなく、思い浮かぶのは大手チェーンの名前だけだ。花柄のマグカップ、しかも前のデザインと近いものを、と思うと少々プレッシャーになる。だが、店に並んでいるものが条件に合わないものしかないということも無いだろう。とりあえず駅前に行けば何かしら、と当たりを付け、また授業に頭を戻した。私が授業に集中しなければ、お母さんが授業料を払っている意味がない。

「……このような過程を経て古典的条件づけが行われます。パブロフの犬という言葉は耳にしたことがあるかもしれませんが、……」

しかしふと意識が逸れる。どうしても、昨夜の記憶が微かに脳裏に残り続けている。心に刺さった声は深く、なかなか抜けない。

どうにか気を紛らわせようと、視線を動かす。すると、隣で忙しく動くシャーペンが目にとまった。

そこには、一つ上の先輩がノートを取っている。

桜さん、という。出会ったのはサークルだが、学部学科まで同じなのを知って仲良くなった。私が一年だった去年のことである。

ふと、先輩の黒く長い髪が一房肩から落ちた。ペンを取りながら、片手間で髪を耳にかけていく。

長くすらつとした指が耳の縁を撫でるようにして離れていくのが、妙に視線を掴んで離さない。

「ん？」

視線に気づいたのか、先輩がふとこちらを見上げる。

「すみません、」

慌てて視線を自分のノートに戻す。いけない、集中しなくちゃ。そう言い聞かせ、頭を再び授業の世界に沈めた。

「今日に行く？ サークル」

授業が終わって、机の上を片付けながら桜さんがそう訊ねた。

「今日に行けないんです、用事があったて」

「そっかあ、残念」

切れ長の目はきつい印象を与えるが、話してみると存外柔らかい性格と話し方をする人だった。「どこか、買い物にでも行くの？」

桜さんが、私の手にあるICカードを見てそう聞いた。私の家は徒歩圏内にあるから、私がこれを持っているのは珍しいのだろう。私もそもそもそんなに出かける質でもない。

「はい、ちょっと駅前まで行って買い物しようかと」

「そうなんだ！ いいなあ……私も行っていい？ どうせこの後私も自由だし」
「いいですよ、行きましょう」

桜さんがそう言ったことに、少し気が緩んだ。マグカップを選ぶことは、昨夜のことをどうしても思い起こさせる。誰かと話してれば気は紛れるし、その提案をしたのが桜さんなら一層いい提案だった。

「お母さんが今度誕生日なので、マグカップを買おうと思うんです。花柄が好きだから、そういうのが欲しいなって」

声のトーンや表情、全てに気を遣って、軽いノリになるように嘘を話す。これは私が今までに身に付けた、人を心配させない方法である。どうしても気分が沈んで暗く見えてしまう翌朝の学校で、気分じゃない人に気分じゃないことを話すのが嫌だった。

桜さんは案の定、ぱつと笑顔になって「そうなんだ！ おめでとう」と言う。きつと私の小芝居は成功した。

「あれ？ 桜と蓄ちゃんだ」

教室を出て歩いていると、ふとそんな声が聞こえた。後方からの優しい男性の声は、私にも聞き覚えがある。そして誰か想像がついたとき、少し気分が上がった。そこにいるのは案の定、同じサークルの裕さんだ。桜さんと同じ、三年生である。

「あ、裕」

「今日サークル行く？」

「ううん、蓄ちゃんと一緒に買い物に行くから」

そう言つて桜さんが私の両肩に手を置く。

「そっか。俺は今日行つたらしばらく行けないから、今度の飲み会で会えたらいいな」

そういえば、グループに来週飲み会をするという連絡が回つてきていた気がする、と思ひ出した。

「桜さん、行きますか？」

「わいわいするの好きだし、行こうかな」

「蓄ちゃんも行く？」と尋ねられる。桜さんがいるならいいかもしれない。未成年に無理にお酒を飲ませようとするほど、凶悪なサークルでもない。

裕さんと別れると、学校を出て裕さんと駅前まで行くバスに乗る。裕さんのゼミの話、友達の話、他愛もない話が楽しくて、店に着いてマグカップを選んでいる間もひたすら話していた。家に帰るくらいなら、ずっとそうしていたいと思うほど。

しかしそんな時間が続くわけもなく、ちゃんと朝に約束していた八時までに、新聞に包まれたマグカップと共に家に帰った。

「おかえり。今日はお父さんいないわ」

「そう、良かった」

リュックからマグカップを取り出し、お母さんに渡す。

「これ、気に入ってくれるといいんだけど」

「本当に買ってきてくれたの？ ありがとう、本当に優しい子ね」

桜さんと一緒に選んだマグカップは、なるべく前の形とデザインに近づけた花柄のものだ。花

に蝶が舞う柄はもちろん完全に一緒なものではないけど、それを抜きにしてもかなり同じようなものが見つかるとは思わなかった。

「また割られるといけないから、それは引き出しの方に入れてくといいかもね」

そう提案すると、お母さんは笑った。

「そうね、もつと安全な場所に置いとけば、きっと大丈夫」

「うん。じゃあ、お風呂に入ってくるね。ご飯はその後に食べるから」

「分かったわ」

緊張が解けたように笑うお母さんの様子にほっとする。緊張していたのか、途端に少し重くなった背中を伸ばしながら、私は部屋に向かった。

それからは何も無い日が続いた。いつ爆発するか分からない人と一緒に住むのはそれだけで神経を使うが、何もない日にはそれはそれで感謝して寝るのが私のルールだ。明日のことは分からないのだから。

今日は一限からである。そうすると、お母さんの出勤時間と被る。

「じゃあ行ってくるね。今日はサークルの人とご飯食べてくるから、帰りは遅くなる」

「そう。ちゃんと帰ってきてね」

「分かってるよ。行ってきます」

「行っってらっしゃい」

授業をこなし、場所である大学近くの居酒屋に向かう。正直お酒や酔っ払いなんて目にも入れたくないけど、世の中の酔っ払いが全てお父さんと同じような酔い方をするわけではないことを、大学に一年いて少しずつ学んできた。だから大丈夫。そう思いながら、店の前に着く。

「桜さん！」

「あ、蓄ちゃん」

そう声をかけた瞬間に、桜さんが裕さんと話していたことに気づいた。しかし桜さんはそんなことを気にする様子もなく、良かった来てくれて、と笑う。

「……ごめんさい、邪魔しましたか？」

「いいのよ、大丈夫」

「うん。蓄ちゃんとも喋りたかったし」

二人が答える。そう言ってもらえるのが嬉しかった。桜さんは好きな先輩だし、裕さんは少しかっこいいな、なんて思っている。噂では彼女がいるそうだけど、実際のところは知らない。噂がある以上、無駄なことは出来ないけれど。

「じゃあそろそろ全員揃いましたー？ 店入りましょー」

主催の二年生がそう声を張る。集まっているのは十人ほどで、程よく過ごして帰れそうだと思った。

掘りごたつの広い席に通され、お酒やら料理やらが運ばれてくる。少しすると各々で盛り上がり始めたのを、空気だけ楽しみながらウーロン茶を飲んだ。視線はつい、男子のグループで楽し

そうに笑う裕さんの方を見てしまふ。

「蓄、久し振りじゃない？」

反対の席から誰かが少し歩いてきたかと思えば、それは同じ二年生の奈々だった。彼女も誕生日はまだなはずなのに、何の悪気もなさそうにカシスオレンジを飲んでる。飲み物が何かは別に私に関係ないしな、と思いつながら奈々の座る場所を作った。

「あたし最近シフトめちゃくちや入れられちゃってさあ、なかなか行けなくなってたんだよね。蓄は行けてる？」

「一応、週一くらいなら行けてるよ」

元々お喋りで明るい奈々は、お酒と雰囲気の良いか普段よりよく喋るようになっていた。と言っても奈々が一方的にしゃべることはないから、話しやすい人の一人になっている。

しばらく喋った後、ふと私の様子に気づいたのか、奈々が声色を変えて話した。

「蓄、誰か気になる人でもいるの？」

顔がにやにやと笑っている。

「いや、そんなんじゃないよ」

「嘘だあ。誰？ 中村さん？ 佐々木？ 克樹さん？ あ、まさかの村井くん？」

「ちよつと待ってやめて」

その場にいた全員の名前を挙げ始めたから、慌てて奈々を止める。だがそんな抵抗に奈々が屈することなどなく、男性の最後の一人である裕さん？ と言った。その瞬間わずかに動きが止まっ

てしまう。思わず自分でも恥ずかしくなるほどの分かりやすさに、奈々は手を叩いて笑った。

「ねえ分かりやすすぎでしょ！ 大丈夫だよ今声小さくしてたし向こうも向こうで喋ってるから聞こえてないって」

「そうかもしれないけど、」

目尻を拭いながら奈々は呼吸を整える。自分の分かりやすさが恥ずかしくすぎて顔が熱い。

「やばウケる……、じゃあ、教えてくれたからあたしも一つ教えてあげるね。裕さんはやめとけ」
「え」

突然の発言に、思わずそんな声が出た。

「どうして？」

「だってあの人、結構後輩の女の子食ってるって噂だよ」

奈々の話によれば、バイト先や裕さんのいる学部の後輩や他のサークルの女の子をつまみ食いしている、らしい。そう派手に噂にならないのは、本人が口止めしているからとか、接点も少なく目立たない女の子にしているために周りの男友達も気づかないから、とか。

突然の穏やかでない話に、少しだけ気分が落ちる。

「でも裕さんって、優しくて真面目そうな人じゃない」

「そうだけど、実はそうじゃないらしいんだよって話」

はあ、と思う。とはいえ私も気になる程度で裕さんと距離が縮まる予定なんて無いから、関係のない話と思えばそれまでだと思った。それなら懂れはそのまま取っておいた方が楽しいから、

そのままにしておこうと判断する。

「ま、経済学部ってなんかそんな雰囲気悪いし」

「それは……偏見じゃない？」

「あー、マジでそう」

カシスオレンジを飲みながらそう言い、空にした後に奈々は一言付け加えた。

「あたしは桜さんもちよつと怖いけど」

「……そうなの」

「だって距離感バグってんじゃない、あの人」

奈々の視線の先には、四年生の女性の先輩に赤い顔で寄りかかる桜さんの姿があった。

「あたし心配してんのよ。気を付けてね、蕾」

「……警戒しすぎだよ。でも、分かった」

「本当だよ、こんな可愛い顔してるんだから」

そう言うと、奈々はまた別の話を始めた。

場の雰囲気は浮かされたのか、奈々との話があったせいかわからないが、熱を帯びたような心地よさとかかなりの疲労感と共に店を出た。こういう時は門限を十一時まで延ばしてくれるから、それに間に合うように店を出る。

十分ほどして家に差し掛かると、バン、と強くドアが開く音がした。

背中が固まり、一瞬で身構える。浮かぶ風船のように心地よい気分が一気に冷めた。そっと玄関を開けると、案の定お父さんが暴れていた。少し油断したかもしれない、と思いがら音を立てないように家に入る。

「ねえお願いそれはやめて！」

突然あの刺さるような声が聞こえ、体が竦む。声は台所の方から聞こえる。

最悪の事態が頭を過り、足音を立てないように台所に近づき覗く。

すると、壁際に座り込むお母さんの前に立ちはだかるお父さんがいた。右手には冷たい光でぎらつく包丁がある。

「お父さん、！」

慌てて間に立ち、リュックを前にして防衛体制を取る。今まで喧嘩の間に入ったことはないから、あまりの恐怖に体が固く強張る。

「うるさい退け！」

「私達死んじゃうから！ 警察呼ばないといけないから！」

無我夢中で叫ぶ。いつ刺されるか分からず、俯いてその瞬間が来ないことを期待するしか出来ない。

「……チツ」

お父さんは包丁を投げると、そのまま外へ出ていった。止めに行かなければ、と思うが、普段は真面目な人である。これ以上対峙したくない恐怖にも負け、きつと他の人に危害を加えること

はないだろうと判断して追いかけるのはやめた。

それよりもお母さんは大丈夫だろうか。

「大丈夫、お母さ」

「蓄、」

体を引き寄せられ、バランスを崩して倒れ込んだまま強く抱きしめられた。背中に回る腕の強さと、胸の辺りで打たれる鼓動の速さから、相当怖かったのだろうと察する。

「大丈夫だよお母さん、もう大丈夫だから」

「蓄、蓄……」

しばらくそうして、徐々にお母さんの呼吸と鼓動が落ち着いていく。

「……蓄、ありがとう、……」

「ごめんね、家にいなくて」

もう大丈夫だからね、と声をかける。なるべく優しく、落ち着いた穏やかな声色で。

「うん、そうね……」

そうして、やっと体が離れた。しかしすぐに、お母さんは私の肩を掴み口を開いた。

「蓄、私のそばにいてね。私と一緒にいてね。私達は親子だから。私達は一緒にいないと生きて

いけないから」

絶るような顔で、目で、声音で、零すようにお母さんは言う。

形容しがたい感覚が襲う。連帯。絆。安全と安心。親密な親子関係。そういう言葉で表せるも

のを感じて、私は私の立ち位置を確認した。お母さんには私がいけないといけない。そして私にもお母さんがいけないといけない。私達はそうやって生きてきたから。

しかし同時に、お母さんの言葉がどこかで重くのしかかった。背中にその重みがのしかかる感覚がする。しかし今持っている責任感や使命感に比べればほんのわずかなものだし、その感情が優先されることを考えれば、そんな重さなんてあつてはならない。あつてはいけない。破れたところを鮮やかな折り紙で塞ぐように、責任感と使命感で私を塗りつぶす。

「うん、分かってるよ。私はずっとお母さんのそばにいるからね。私はずっと、お母さんの味方だから。大丈夫、大丈夫だよ」

お母さんの手を握り、撫でながらそう言う。緊張が緩み、解けていくようにお母さんは笑った。その笑顔に、私も安堵する。

「大丈夫、お父さんがお酒飲んじゃったのが悪いね。もう今日は寝ていいはずだから、寝ようよ。私も眠いなあ」

「そうね、もう寝ようか」

お母さんを立ち上げらせ、寝室まで送る。

「ゆっくり寝られるといいね。おやすみ、お母さん」

「おやすみ、蕾。手と顔は洗ってから寝るようにしてね」

ドアを閉じる。息をつく。私はお母さんと一緒にいる。大丈夫、それでいい。

翌朝、家はもう私だけの静かな場所だった。

今日の授業は午後から。時刻は十時で、これからお風呂に入ったりすれば問題なく間に合う。しかし準備している間、頭は常に落ち着かなかった。シャワーを浴びていても、ご飯を食べていても、ふとした瞬間にお母さんの顔が過る。

私のそばにいてね。私と一緒にいてね。私達は親子だから。私達は一緒にいないと生きていけないから。

頼んでいなくても、脳は昨夜の様子を再生する。目が、声が、こびりついて頭から離れない。不思議なのは、今までの関係を言語化しただけなのに、ここまで自分が動揺しているらしいことだった。今までと同じ事を確認しただけなのに。言葉にしただけなのに。

多分きつと、それは初めて明確に命の危機を感じたからだ。いつも過ごしている場所で、まるでサスペンス系のドラマのような光景が広がっていたのは、妙に現実味がなくて逆に恐ろしくなる。

そういうことだ。だから、こんなにも動揺してしまうんだ。別にお母さんが悪いわけじゃない。そう言い聞かせながら準備をしていると、気づけばもう家を出ないといけない時間になっていった。髪も化粧もままならないまま、リュックを持って家を出る。

学校について、授業を受けていればなんとかなると思った。しかしそれは私の誤算のようで、心は思った以上に上手く切り替わらない。

今日はたまたま一人で受ける授業しかなかった。一層気分が紛れない。ずっとぎらつく包丁に支配される。お母さんの声が後ろで聞こえる。

夕方になり、やっと授業が終わる。一人で歩いていると、また聞き覚えのある声でした。

「蓄ちゃん、大丈夫？」

前から近づいてきた裕さんが、私を見つけて声をかけた。

「え、あ、はい、大丈夫です」

「大丈夫な顔じゃないよ。大丈夫？ 昨日寝不足になっちゃった？」

「いえ、大丈夫、です」

優しく追及する裕さんに、徐々にここまで聞いてくれるならいつ話してしまおうか、という気になる。心配させてしまうかも、面倒くさいと思われてしまうかも、という理性は働くが、それらを超えて楽になってしまいたいという気持ちが勝った。

「……昨日、家で、少し色々あつて」

「そうなんだ。俺でよかつたら話聞くんよ」

「……、ありがとうございます」

ご飯屋とかじゃ他の人もいるし話しづらいよね、と言いなから、向かったのは裕さんの車だった。閉じられた空間だから、確かに裕さん以外に聞かれることはない。

「すみません、気を遣って頂いて」

「大丈夫。そんな顔してる後輩を放っておけないよ」

ボタンとドアが閉まり、急に周りの音が消える。私と裕さんだけの空間になった。

重いことでも受け止めるから、話せる範囲で話してくれる？ 助手席に座った私の肩を撫でながら、裕さんは優しくそう言った。

温かく、しっかりとした手に、一気に感情が堰を切ったように溢れ出した。順序だてて話そうとしても、どうしても綺麗には話せない。めちゃくちゃになつてるだろうな、と思いながらも、裕さんは表情一つ変えず優しく聞いてくれた。

「……そっか、大変だね。昨日もそうだしとつくに警察沙汰になつてもおかしくないと俺は思うけど、お母さんが事を大きくしたくないと思うなら仕方ないね」

「……、はい、……なんか、こんな色々話しちゃってごめんさい、」

「大丈夫。俺が話してつて言つたんだから、むしろここまで話してくれてありがとう。辛かったね」
「……辛い、んですかね、私……」

正直、自分が何をどう思っているのか分からなかった。何故こんなに動揺しているのか、何故顔見知り程度の裕さんに気づけば全部話してしまつていたのか、そして、何故お母さんの言葉が今も変わらず脳裏に焼き付いて離れないのか。

「辛いんだと思うよ。じゃないと、さつき会つたばかりの俺に、ここまで話してくれないだろうし」
「……確かに、そうですね……」

ふと、裕さんが体ごとこちらを向いた。

「そういう辛さをさ、お母さんにも話せないなら、……これからも、俺に話してくれない？」

「……え」

そう言う裕さんの目は存外真剣だった。軽の車の中は、そんな真つ直ぐな眼差しから逃げるには少し狭い。

「……迷惑、じゃないですか。だって、こんな、……面倒、だと思っし」

「大丈夫。さっきも言ったけど、俺が話してって言って聞かせてもらったんだから。俺蓄ちゃんなら、いつでもこういう風に聞いてあげられるよ」

「……そう、ですか」

またさっきのように、肩を撫でられる。少しでも力が緩んでしまうのだから、私はとんでもなく分かりやすい。

でもふと、その反応が私の本当の感情と結びついていのだろうか、と思った。雰囲気と行動的に、これは恋愛とか言うものの始まりなんだろうか。突然近づき出したその二文字が、嬉しくも妙に変だと思う。

「蓄ちゃん、人肌感じるの好きでしょ。俺は、こうやって安心させてもあげられるよ。……だから、これからも話してくれると嬉しいな。そんな顔、させたくないし」

「……ありがとうございます」

何かただならぬ雰囲気が漂い始めているのを察した。こういうのを経て彼氏とかそういう関係が出来るのかもしれない、と考えてみる。だが、理論とは別に体は徐々に緊張していく。

「ねえ、ハグしていい？ ハグって、ストレス緩和する効果があるらしいよ。」

拒絶、という字が浮かぶ。体が一気に強張る。でも言葉にして言ってしまったらどうなるだろうか。もしかしたら、お父さんみたいに何か反撃してくるかもしれない。

ぐるぐると考えていたら、沈黙を肯定と捉えてしまったのか、少しずつ裕さんが近づいてくる。かっこいいと思っていた裕さんの顔が少しずつ歪み始めていく。車の中がどんどん狭くなっていく。

抱き締められた体は、思った以上に裕さんの体に収まってしまった。妙に近い肌の匂い、背中に回る腕の太さと重さ。手が腰のあたりにあるのが、ここから逃げられないと感じさせる。実は人の体は拘束具にもなるのかもしれない。

気持ち悪い。

数秒かもしれないし、数分かもしれない。体が離れ、裕さんがどう？と尋ねる。笑っている。笑っているのに、それが普段と同じ優しい笑顔には見えない。

反射的に出た言葉は、全く答えにはなっていなかった。

「……じゃあ、私はこれで」

「……え、あ、うん。帰れそう？ 家に帰るの嫌なら、俺のどこ来てもいいからね」

「……ありがとうございます、それじゃ」

話している間に真っ暗になった車外に出ると、思ったより冷たい空気が体を包んだ。乗る前から冷えたのだろうか。それとも閉め切った車内だったから温度が上がっていたんだらうか。多分両方だ。

空気に冷やされ、頭と体が冷静さを取り戻していく。

ふと、昨日の奈々の言葉を思い出した。つまみ食いしてることか、と納得する。目立たない女の子とか、そういう自覚はあったけれど、いざターゲットにされると何だか辛くなる。利用された。利用されかけた、かもしれないけど、そんなことどうでもいいくらい混乱していた。表に出そうとも思っていないかった淡い憧れが、ズタズタに千切られて散った。見たくも無かった醜悪な部分を見せられた。何で、何で急にこんな思いを。

冷えた空気よりもぬるい温度で、体に回った腕の感覚が纏わりついて離れない。背中がどうにも気持ち悪い。

「……、うえ、」

気分が悪くなったのを、しゃがみこんで堪える。夜道だしこうしていたらまた誰かに捕まるかもしれない、と思つて数秒してまた立ち上がった。

時刻は七時半。今から帰れば十分門限には間に合うけど、ぎりぎりになつたらそれはそれで母さんが心配してしまう。急いで帰らなければ。

でも、今の状態で家に帰つてもそれはそれで心配させてしまうと思つた。今はどんな人にも会いたくない。私の気持ちに触れようとする誰とも、私の気持ちを動かすどんなものとも近づきたくなかった。

そう思つた瞬間足が止まり、そこから動けなくなった。動かそうにも、足が私のものであるのをやめたように、そこから動こうともしてくれない。

動けない。動かせない。気持ちばかりが焦る。二人組が私を怪訝な目で見て去っていった。

ぬるい水滴が手にぶつかる。雨かと思つたが、空は晴れている。数秒考えて、それが涙だと気づいた。確かに気づくと街灯の光がぼやけている。

それ以上涙を溢さないように、目頭を押さえて数秒待つ。衝動が去つたのを確認して、また歩き出した。どんな理由があれ、私は家に帰らないといけない。

時折止まりそうになる足を動かしながら、なんとか家に辿り着いた。

「おかえり、蕾。今日お父さん仕事で遅くなるつて言うから、二人でご飯食べちゃおう」

「……うん」

本当は、ご飯食べてきたからとか言つて逃げ出したかった。でもお母さんのことを考えると、一緒にご飯を食べてあげなければならぬ。大きな渦に飲み込まれたような心を隠しても、お母さんのために。それがお母さんのためだから。私はお母さんと一緒にいるから。

準備していざ食卓に着くと、お母さんは笑つていた。今日の授業の内容とか、職場の同僚が今日は美味しいクッキーを差し入れてくれたとか、そういう他愛もない話が続いていた。普段の日常と同じことをしているが、わずかでも昨日の事や不安定な感情が出てしまつたらその日常は一気に壊れる。まるで繊細なガラス細工のような、そんな食卓だった。それでも、お母さんがこういう風に笑っているなら、私はちゃんと演技が出来ているんだと思う。お母さんと一緒にいるつて証明できるのかもしれない。それが何より嬉しいことだ。

「明日、お母さんが今日食べたクッキーを買つてくるわ。一緒に食べようね、蕾」

「うん。楽しみだな」

穏やかに結ばれる約束。それを破ったらどうなるか、私には分からなかった。

ベッドに入っても、全く眠れなかった。お母さんのこと、裕さんのことが頭を駆け巡って眠りそうな体を叩き起こす。お母さんの継るような目が私を見たかと思えば、それに付け込もうと顔を歪ませながら裕さんが近づいてくる。奈々の忠告がこんな早さで活きるなんて思わなかった。私は、何になるうとしているんだろう。

原因は分からないけど、お母さんの気持ちに何故か素直に忠実になれない。普段誰かをかっこいいなんて思うことなかったから、小学生みたいな稚拙な気の持ち方しか分からなかった私は、どうしたらいいか分からなくなる。吐き気がする。

ふと泣きそうになったが、しかし一度押さえた涙腺はもう涙を流さなかった。今だったら泣いていいのに。むしろ泣いて気分が落ち着くならそうしたかったのに。体はつくづくいう事を聞かなくなるのだと思った。

翌朝、睡眠不足のまま一限のために準備する。つまり、お母さんと顔を合わせるということだ。「クッキー、楽しみにしててね。蕾はチョコ味が好きでしょう。あと、明日は蕾の誕生日ね。二十歳になるならとびきり豪華なケーキがいいわね……そっちも同じチョコでいい？」

「うん。どっちも楽しみにしてるね。行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そうだ、もうすぐ誕生日だ。分かっているのに、頭の中はそれ以外のことで一杯で、つい意識の外から外れていた。

昔はチョコレートケーキが好きだった。しかし今は、ケーキを食べるならどちらかと言うとフルーツケーキを食べたくなったりする。

しかし、そんな嗜好の変化はここでは要らない。私は変わらなないと、安定しているとお母さんに安心させなければいけない。

いざ家から離れると、突然体が重くなった。睡眠不足のせいかな頭は働かない。そのくせここ数日のことを強制的に再生しているのだから質が悪い。授業中も、わっと叫び出しそうな衝動が来たかと思えば泣きそうになり、それらが去ったかと思えば疲れて気分が落ちる。それが五分くらいの周期で起こる。授業どころじゃなかった。こんなことにずっと苛まれてしまうならいつそ死んでしまおうか、と自死衝動まで湧き上がる。どうせまた数秒後には去るんだろうと思えばその通りで、気は休まることを知らない。

今日最後になる三つ目の授業に向かうとき、身に覚えのある感覚がした。記憶を手繰り寄せて、そういえば次は桜さんと同じ授業だ、と思いつく。こんな状態の私では心配をかけてしまうという気持ちと、利用でも何でもされていいから桜さんに頼りたいという気持ちが同時に湧き上がる。勝ったのは相変わらず後者だった。

「桜さん、」

教室には行ってきた桜さんを見つけるや否や、気づけば広い教室なのに桜さんに駆けよってしまっていた。しかし、いざ目の前にすると何を言えいいのか分からなくなる。

桜さんの顔を見たまま固まってしまった私に何か感じ取ったのか、大丈夫？ と桜さんが声をかける。

「……大丈夫、じゃないです、」

「どこかに座る？ その様子なら授業は受けられなさそうね」

「……いや、授業は受けます、その後でいいですから、……」

そう、分かったと心配そうに言うと、桜さんは私の隣の席に着いた。

いざ受けてみても、先生の話は全く耳に入ってこない。集中したいのに、頭の中の渦が私を巻き込んで離さない。

桜さんがシャーペンを走らせるのを、ただじつと見ていた。ほっそりとした手が綺麗だな、とどうでもいいことだけを辛うじて考えられた。

「授業、頭に入った？ 分からなければ後で私が教えてあげるから」

「ありがとうございます」

二人になれる場所を探す、桜さんは裕さんのように車を持っている訳でもない。大学構内でそんなところが見つかるとは訳もない。

「ごめん、私の家しか場所がなさそう……それでもいい？」

桜さんはふとそんなことを言った。何でもよかった。とにかく、桜さんに頼れるなら。

桜さんは進学と共に越してきた人で、一人暮らしをしている。一人暮らしは楽しいよ、と前に教えてくれたのをぼんやりと思い出しながら、アパートの玄関を跨いだ。

「話せるところからでいいから、何があったか話してもらえる？ 無理に全部話さなくてもいいから」

その言葉を皮切りに、昨日よりもつと脈絡を考えずに洗いざらい話した。桜さんなら受け止めてもらえるという、よく分からない感覚を根拠にとめどなく話し続ける。

「……もう、どうしたらいいか、分かんないんです。お母さんに対する私の気持ちも分かんないし、裕さんも、意味わかんないし、……」

言い切ると、それまで相槌を打ちながら静かに聞いていた桜さんが、私を抱き締めた。しっかりと手で撫でられている訳でもないし昨日より踏み込んだスキンシップがされているのに、嫌な感じは全くしなかった。背中を撫でる手が温かい。緊張がほどけていく感覚がする。

「頑張ったね、蓄ちゃん」

「そうです……かね、」

桜さんは体を離すと、徐に口を開いた。

「きつと蓄ちゃんはさ、自我を持ち始めているの。お母さんと蓄ちゃんは、同じ血は流れていても違う人間よ。お母さんにそこまで誠実になれなくても、当たり前なの」

「……え、」

青天の霹靂だった。違う人間。違う人間ということは、つまりお母さんを元に行動を決めなくてもいいということ。

「……訳が、分からない」

「そうよね。突然そんなこと言われるとびっくりしちゃうのも当然」

突然何かがばちんと切れ、急に視界が開けた感覚がし始めた。その視界の眩しさに思わず目が眩む。

「あと裕のことは……、男って短絡的なものよ。気にするだけ無駄だ……って、私の従姉妹のお姉ちゃんが昔言ってた。だから、気にしないで」

桜さんがそう優しく話す。私を縛るものを一つずつ解すかのような桜さんが、何かとても特別な人のように見えた。

そんな桜さんに抱き締められたさっきの感覚が、どうも甘く感じられて離れない。背中を感じた温度が心を捉えて離さない。裕さんの時はあんなに強張ってしまったのに、人によってこうも違うのかと最早感心さえる。

「桜、さん、……変なこと言う、かもしれないですけど……もう一回、抱きしめてくれませんか」
思わずそう言っていた。多分裕さんの言う通り、私は人肌が好きなのかもしれない。触りたいとか触りたいとか、そんな衝動がどんどん膨れ上がっているのを感じた。とにかく安心したかった。言う通りになっってしまうのは癪だけど、これが恋とか愛とか呼ぶものなのだろうか。

「いいよ、おいで」

少し身を乗り出すと、柔らかな桜さんの温度に包まれる。甘い肌の匂いが鼻腔を撫る。あまりにも心地がよかった。

「私小さい頃ね、さつき言った従姉妹のお姉ちゃんにこうされるのが好きだったの。安心するよね」

さつきの話もこうしている時に教えてもらったんだ、と話す。

「こういうの、嫌じゃない？ 私、お姉ちゃんと一緒にしたことしていたら距離が近いつて怒られるようになっちゃったから、気を付けているつもりなんだけど……」

体を離すと、不安げな顔でそう聞いていた。

「私は、嫌じゃないです」

確信を込めてそう言った。この感覚は嫌いじゃない。

その時ふと、メッセージの通知音が鳴った。見るとお母さんである。時刻は既に門限を過ぎていた。

一気に背中が粟立つ。

急に気持ちが焦る。

『クッキー楽しみにしててね』。お母さんの声が耳のごく近くで聞こえた気がした。吐息まで感じられるほどに。

帰らなきゃいけない。この時間を手放して、私は帰らなきゃいけない。お母さんとの約束を破

ればどうなるか、私には想像も出来ない。

背中は未だ熱を持って栗立つ。何かがそこで暴れているみたいだ。

「帰る？ 蕾ちゃん」

義務と欲望が天秤に乗る。

皿の揺れは大きい。

その揺れが治まるのを待つように、背中の何かが少しだけ静かになる。

「……桜さん、」

さっきの話が浮かぶ。私がお母さんに誠実になれないのは、自我を持ち始めているからだ。

「何？」

お母さんを優先しなければならぬ。そう頭では分かっているのに、お母さんと分離して得ている今の心地よさの方がずっと大事に感じられた。

揺れはなかなか治まらない。しかし確かに、幅は少しずつ小さくなっていく。

少し息をついて、桜さんに問いかけた。

「大人になるって、悪いことじゃない、ですよね」

私の中では一世一代の話なのに、いざ口に出してみるとどうにも稚拙で幼く響いた。それでも、桜さんは笑って言う。

「うん。むしろ、いいことだよ」

天秤の揺れが治まる。

その瞬間、背中中の皮膚を突き破り、大量の膿と共に羽根の骨格が飛び出した。あまりにも生々しい感覚に背中をさする。幻覚のような体感であることを確認してもなお、全てが飛び出たせいで、一気に背中が重さを失い力が抜ける。

しかし悪い感覚は全くせず、弛緩する体にむしろ気持ちよささえ覚える。

脱力した手でスマホを取り、私はメッセージを送る。

『今日は帰れない』という短い文は、あっさりと送られた。

すぐに既読が付く。数秒して、お母さんから着信が鳴り始めた。切れたかと思えば、またかけてくる。

ごめんね、お母さん。申し訳ない気持ちで沸き上がる。しかしもう、お母さんと共に在り、常にお母さんを優先する私ではいられなくなってしまった。

電源を切り、スマホを伏せる。

画面が見えなくなると、骨だけの羽根でも、そのままどこまでも飛んでいけそうだった。心も含めた全身がふわふわと浮くように高揚し、行動を抑制するための頭は働かなくなっていく。

そんな私の顔を、桜さんの手が撫でる。

「なんだかいい表情ね」

「桜さんのお陰です」

目に付いた、桜さんの黒髪が綺麗だと思う。そのまま降ろしていた桜さんの髪に触れたくなり、耳にかけた。きっと、桜さんじゃないと出来ないし、しないこと。そうは思いながらも、何故そ

れが出来るのか考えることも放棄した。私を止めるものは何も無くなってしまった。

「こんなことすると怒られるわ」

「誰にですか？ 私達大人なんでしょう？ もう私は明日お母さんに怒られますからもういいです」

めちゃくちゃなことを言っていると思った。しかし、桜さんも私に乗る。

「そうね、私達大人だものね」

桜さんと一緒に、カーペットの敷かれた床に倒れ込む。もうここは先輩と後輩の関係ではないところだと知りながら、それならいっそ振り切れるところまで行ってしまえという気持ちになった。もう私はお母さんと分離してしまったのだから、どうせ元には戻れない。

「ふふ、私好きよ。今の蓄ちゃんの方が」

「そうですか？ 嬉しい」

再び、優しく桜さんの手が背中を撫でる。傷口を温かく縫い留めるように、優しく滑っていく。その手は、次は私の唇をなぞった。そうされている間に私の感覚は一層溶けていき、惹かれるがまま指は桜さんの切れ長の目の縁を撫でていた。数秒見つめ合った後、そんな私たちに気づき笑う。

気持ちいい。ただそうして居るだけなのに、まるで桜さんと甘く溶けていくような心地さえする。感覚を共有し、境界線は容易く消え、私達は一つになる。

「ねえ蓄ちゃん。お母さんと一緒にいることをやめたなら、次は私と一緒にいようよ。このまま、

一生、ずっと」

桜さんの目が細まる。私もそうしていたくなつた。お母さんの言葉が一瞬ちらついたが、私は今自分の意思で次に一緒にいる人を決めているのだ。大人だから。

「はい、桜さん」

今はただ私を俯瞰する程の理性もない。そんなことすら今の私にはどうでもよく、ただ桜さんと一緒にいたい気持ちで満たされていた。

もう何時間そうしていたか分からない。私達はそのまま寝ていて、気づくとカーテンの向こうは満月が覗いていた。

スマホを見ると、日付が変わっていた。

今日は私の、二十歳の誕生日だ。

小説部門

奨励賞

傘、舞い散る

瀬名波克弥

強風で窓が煽られる音に、僕は眉をひそめた。

下校時間を三十分も過ぎた教室は薄暗く、誰もいなかった。ただ一人、僕を除いては。

雨の日の読書は、ページをめくる頻度が高くなるのが日課を重ねて得た知識だったが、今日は風の音が邪魔をして、かえって読むのが遅かった。

仕方なく本を閉じ、窓の外に目をやった。綺麗な緑をした木の葉が、風によって揺れている。雨に濡れて、葉が重くなっているせいか、普段より枝がしなっているようにも見える。気だるそうに葉をぶら下げる枝たちは、雨に生気を吸い取られ、太陽に照らしてもらわなければ死んでしまいそうな様子だ。

廊下に出ると、照明が点いていて、教室よりもいくらか明るかった。蛍光灯が切れかかっているのか、奥の方は時折明かりが点滅していた。不規則に廊下を照らすその明かりは、どこか不穩

な空気を醸し出し、不気味な印象を僕に与えた。しかし、トイレはその奥にある。僕は一つため息を吐きながらも、トイレへ歩みを進めた。

点灯と消灯を目まぐるしく繰り返す廊下の蛍光灯は、トイレ内にも影響を及ぼしていた。

光を反射するタイルが輝いては消え、輝いては消え、不安な気持ちを一瞬立ち止めた。トイレの電気を点ければこの不安も消えてなくなるだろう。しかし僕は電気のスイッチに目もくれず用を足した。壁に取り付けられた小さな窓から見ると、風は相変わらずだが雨は止んでいるようだ。

窓から吹く風に僕の前髪は揺らされ、それが妙に鬱陶しい。

所々、塗装の剥げている洗面台の蛇口をひねる。

「冷たいな……」

一日通して降っていた雨のせいで気温が下がったのか、蛇口から勢いよく出た水はかなりの冷たさだった。ハンカチを持っていない僕は手を払い、無理やりに水を落とす。

雨が止んでいる内に帰るか。そう思って、教室に戻りリュックを背負った。時計は十六時四十分を指していた。

教室を出るとき、黒板に書かれている曜日が今日のままになっている事に気が付いた。日付はちゃんと明日の日付になっている。一瞬、どうしようかと迷ったが書き直そうと思わずにチョークを握った。チョークと黒板とが擦れて奏でられた不協和音は、僕の耳に不快を残して消えた。

「火」の字を消して「水」の三画目を書こうとした時、力が入り過ぎたのか、チョークが二つに折れ、片方が床に落ちて転がった。拾い上げ、三画目を書き直した。チョークが落ちて床に着

いた粉は、そのままにして教室を出た。

誰もいない教室に、チヨークの白い粉だけが残った。

階段を降りるとき、僕の心にはいつも憂鬱が漂う。三階から一階まで降りるのは、体力的にはそれほど辛くはない。が、どうも無駄な事をしているようで気がならない。他の学年ならしくていい苦勞をわざわざさせられているようだ。

新学期が始まってもう三カ月が経つ。新しいクラスにも授業にもすっかり慣れたが、この階段の上り下りに慣れるには、まだ時間がかかりそうだった。

一筋の晴れ間も見えやしない灰色の空模様が憂鬱さを加速させていた。

階段を降りきって、校舎の玄関口まで来ると、見覚えのある女子生徒が一人立っている。クラスメイトの佐々木志帆だ。名前は知っているが、会話を交わしたことは無い。

ほんの少し茶色がかった髪 of 彼女は、ドアの縦枠にもたれながらスマホを触っていた。彼女の意識はスマホに集中しているようで、僕のことなどまるで見えてないだろうと思った。誰かを待っているのか。それとも別の理由か。

ふと、雨宿りという言葉が僕の頭に浮かんだ。大きく横に開いているドアの外を見ると、弱々しく降っている雨が見えた。トイレの窓から見た時は止んでいると思ったが、完全に止んではいなかった。

だがそれでも、外に出るのを躊躇するほどの降り方ではない。彼女の意図が掴めないでいると、

急に彼女という人物が壮大な秘密を抱えているように思えてきた。

少し考えた挙句、僕は声をかけることにした。近づいても、こちらの様子に気付いてないようだった。

「佐々木さん？」

呼びかけるや否や、勢いよくこちらを振り向いた。手に持っていたスマホを落としそうになるも、すんでのところでそれをキャッチした。予想外の反応に僕は少し困惑したが、彼女の方がもっと困惑している素振りだ。

「あつ、えつと……」

上手く言葉が出てこないようだった。焦っている彼女を見ると、僕は少しずつ冷静になっていった。その反面彼女の焦りは増すばかりだった。眉を寄せ、右上に視線を向ける仕草は、僕の名前を思い出そうとしているが出てこないようにも見える。

「今帰り？」

名前を覚えられていない可能性がある事はショックだったが、表情には出さないようにし、単調な質問をした。これなら返答は簡単だろう。僕はとりあえず彼女を落ち着かせようと試みた。

「うん、そう」

単調な質問によく似合う簡潔な答えだった。思春期の娘が父親にする、気の無い返事のように。彼女の返答はそれきりで、僕の次の言葉を待っているようだった。

僕は二人の間に流れる気まずい空気を感じながらも、再び口を開いた。背中が汗をかいている

ような気もしてきた。

「誰か待ってるの？」素朴な疑問だった。

「うん、ちよつとね……」

意味ありげな答えに聞こえた。質問を重ねるも、彼女の意図は掴めないままで、疑問だけが大きくなっていった。

気まずい雰囲気を彼女も察したらしく、どことなくソワソワし始めた。何か気の利いた一言でも言おうかとも思ったが、あいにく僕はこの状況を打開するだけの言葉を思いつかず、ただ彼女と同じように立ち尽くすだけだった。

そこで流れた時間はひどく長く感じられた。永遠に突っ立っている罪を背負わされている気まですてきた。彼女も困っているが、僕も困っている。汗をかいているせいか、背中の方がとても熱く感じた。何でもいいから、とにかく会話を。

あなさ、と言いかけた時、後ろの方から声がした。

「志帆ー。待った？」

振り返ると見た事のない男子生徒が立っていた。身長が高く、夏服の袖から見える腕には細い血管が浮いている。年季の入った手提げカバンを肩にかけていたが、体に対してカバンがえらく小さく見えた。大股で、僕らの方に近づいてくる。道端の雑草を見るような目で僕を一瞥し、すぐ佐々木志帆の方に視線を戻した。

「龍二。もく、遅いよ」

僕と会話（あれを会話と呼べるのかは甚だ疑問だが）していた時よりも、トーンの高い声で呼びかけに応え、佐々木志帆が男の方に駆け寄っていった。二人は親密な関係にあるらしいことが察せられる。

二人が外の方に歩いていく。ドアを出るとき、佐々木志帆と目が合った。僕は軽く会釈をしたが、向こうは顔をそらした。その冷やかな対応に、心の中に冷たい石を投げつけられたような感覚に陥った。

「あ、ちよつと待つて」

佐々木志帆が籠二という男を呼び止めた。二人の足が止まる。僕が立っているところからさほど距離が離れていないため、会話は十分に聞こえる。

「何だ？」

「せつかくだしさ、傘さしていこうよ。私、折り畳み持つてきてるんだ」

そういうとカバンを漁り、傘を探し始めた。

「何でだよ、雨全然降ってねえじゃん」

男の言う通りだった。雨の降りは見えないほどに弱く、いつ止んでもおかしくない状況だった。

「いいじゃん、せつかくだしさ」

強引に傘を差しだし、ねだるような上目遣いで男を見つめていた。

「分かったよ、しょうがねえな」

吐いた言葉とは裏腹に、男は少し微笑みを浮かべながら傘を受け取り、それをさして二人は歩

き始めた。

見ていた僕は、何か細い針のようなもので心が突つかれているような痛みを覚えたが、その正体は明らかでは無かった。

後を尾けようとは思っていなかったが、道が同じ方向なので結果的に後を尾けていることになってしまった。

どこかで鳴いているカエルの声が聞こえ、僕は小さく笑った。

僕の帰り道は、思っていたよりずっと二人と同じ方向だった。尾けられていると勘違いされるのも嫌なので、二人が振り向いたとしても僕とは分からないであろう距離を保ちつつ、雨に濡れていつもより濃い色をしたアスファルトの上を歩いた。

今日のような雨の日は、晴れの日とは全然違う。走る車も、しつこく纏わりつくような空気も、人々の気分さえも。

だが、雨が嫌いかと言われればそうでもなかった。どことなく重たく沈んだこの空気が、少し心地よいまであった。日課である放課後の読書がはかどるからだという理由だけでは無いと思っ
ている。上手く言葉にする術を持ち合わせていないが、とにかく雨の独特な空気が気に入っ
ている。

前を見ると、傘をさす二人が横断歩道の信号を待っていた。僕は慌てて立ち止まる。この交差点の信号はなかなか変わらないことを知っていたので、少しだけ焦った。歩道の真ん中で立ち止

まるのも変だが、かといって歩き続けると二人に気付かれてしまう恐れがある。そうなたらきつと面倒くさい。考えた末、近くの建物の陰に身を隠した。幸い人通りは少なく、この行為を不審に思う人もいないだろう。

焦った気持ちを静め心を落ち着かせて、そつと陰から覗くと信号は青に変わり、再び二人は歩き出していた。

ほつと胸を撫で下ろし、僕も再び歩く事にした。雨は弱かったが、それでも晒され続けた僕の前髪は少しづつ重さを含み、まとまって額にくつついていた。それを何度か掃い、じつとりとした汗を拭いた。

反対側の歩道を見ると、黒いランドセルを背負った小学生が四人ほど固まって歩いていた。彼らは皆長靴を履き、水たまりなど気にも留めない様子でただ真つ直ぐに歩いていく。

一人は雨合羽を着ていたが、サイズが大きいのか、後ろの裾が地面と擦れていた。それを誰かが踏み、合羽を着た子が急に立ち止まってしまふ様子を面白がっていた。合羽の子は止めるよとでも言うように後ろを振り向いてにらみ、何やら呟いていた。往来する車の音でその声はかき消され、僕の耳には届かなかつた。

彼らの悪戯は反省の色を見せず、その後も何度か合羽の裾を踏んでいた。合羽の子は怒つた様子で一番後ろに回って、他の三人を監視するように歩き始めた。

しかしそれほど腹をたててはいないようで、四人はおしゃべりを始めた。それも、大きな声で。今度は僕のところまで声が届いた。内容までは分からなかつた。部分的には聞こえてきて、下品

な言葉は特に耳が拾いやすかった。その言葉を彼らは一際大きく発音するからだ。それに対し、残りの者は大爆笑だった。

僕は自身の小学生時代を彼らに重ねた。何でもないようなことでただひたすらに笑っていた。今になると、何故あんなにも低俗な会話で笑いが止まらなかつたのか不思議でならない。しかし振り返ると、無邪気さが懐かしくも思え、成長して失ってしまったものを惜しくも感じた。彼ら四人もいずれは僕のようになってしまうのだろうか、と思うと同情の念が湧いてきた。

一人が、彼らの反対側の歩道（つまり僕が歩いている方の歩道）に傘をさす男女を見つけた。「カップルだー！」その声ははつきりとここまで聞こえた。

一人が囁し立てたのをきっかけに、残りの三人も後に続いた。

「カップルがいるぞー！」

「あ！相合傘してる！」

何がそんなに面白いのか、彼らの盛り上がりは最高潮に達した。先程のおしゃべりの比ではない。恐らく低学年なのだろう。よく分かっているにも関わらず男女の関係に興味津々な時期だ。僕は小学二年の頃、大学からやってきた教育実習生に「彼氏はいますかー？」と質問をしていた同級生を思い出した。それを聞いてどうするんだよ、と口には出さなかつたが心の中でツッコんだ記憶がある。

囁し立てられた佐々木志帆と男は、恥ずかしいのか、早足になった。いや、恥ずかしがっているのは佐々木志帆だけのようだった。男の方は変わらず傘を一定の高さでさし続け、堂々と歩い

ていく。佐々木志帆は肩をすくめ、いかにも照れているといった様子で顔を斜めに俯いてぎこちなく歩いている。

小学生たちは「カップルバイバイ！」と手を振っていた。

あと十年もすれば、彼らにもカップルとなる相手が出る事だろう。そう思うと心にもやついたものが表れ始めたが、足元の水溜まりを踏んで無理やりかき消した。

前を向くと二人との間は大分離れていた。かろうじてあの二人と認識できるぐらいだ。

その時、一際強い風が吹きつけた。一瞬立ち止まってしまふほどの風だった。二人がさしている傘もその影響を受け、反対側に裏返ってしまったのが見えた。男がそれを難なく直す。その横で佐々木志帆が短いスカートを抑えていた。スカートの裾が風に揺れ、それを見ながら僕は邪な気持ちになるのを抑えられなかった。

二人は再び歩き出したが、男が変わって車道側を歩き出した。

「紳士的だな」

僕は微塵にも思っていないことを呟いた。

しばらく歩いていると、また二人が信号待ちで立ち止まった。僕は再度物陰に隠れ、顔だけ出して様子を窺った。

信号待ちの間、一体僕は何をやっているのだろうかとう自問自答を始めた。何をこそしているのか。傍目から見るときつと不審者だ。明らかに二人を尾行している。何も知らない人から見ると、僕が男に嫉妬している醜い男に見えるのだろうか。

嫉妬、という頭に浮かんだ言葉を鼻で笑った。そんな訳がない。もう一度、笑った。

僕が立てた微かな笑い声はすぐに消えた。後に残ったのは、さっきの「一体自分は何をやっているんだ」という問いだけだった。

恐らく、二人は僕のことなどこれっぽっちも気に留めていない。僕がどうしようが二人は何も思わない。僕が何をしたところで二人の感情を揺さぶることなど出来やしないだろう。別に何をしようという気も無いが。

そんなことを考えているといつの間にか信号が変わっていた。自問自答に対する適切な答えを見出せないまま、またアスファルトの上を進み始めた。

二人の前の方から、車椅子に乗ったお婆さんが近付いていた。車椅子に対して歩道は狭く、お婆さんを含めた三人がすれ違う事ができる幅では無かった。

二人と車椅子との間にはまだ距離があった。二人は変わらず談笑を続けている。常に佐々木志帆が男の方を見上げるようにして話しており、時折覗かせる横顔には澁刺とした笑みが溢れていた。僕がいつもクラスで見ている笑顔とはどこかが違っていている気がした。違いは明確に分からないが、強いて言うなら普段の笑顔よりも数段輝いて見えた。

車椅子との距離が次第に縮まってきた。二人は話に夢中でまた気が付いていない様子だった。

先に車椅子に気付いたのは男の方だった。軽く声をかけ、佐々木志帆の腕を引っ張り、自らの方に寄せた。

二人は縦に並び、出来る限り歩道の片側に寄ったが、それでもまた車椅子が通るには狭そう

だった。

仕方なく二人は立ち止まり、車椅子のお婆さんが通り過ぎるのを待った。すれ違う時、お婆さんはゆっくりと会釈をした。大きく頭を下げ、精一杯の感謝を表現しているようだった。

二人とも会釈を返し、目の前を通る車椅子とお婆さんをじっと見ていた。

お婆さんは通り過ぎてすぐに二人の方を振り返り、また会釈をした。

車椅子に乗っているせいも、後ろを向くことが困難そうだったが、それでも首から上をしつかりと二人の方に向け、頭を下げ、感謝の意を示した。

二人は慌てて会釈を返し、お婆さんを見送った。佐々木志帆が笑顔で小さく手を振っていた。それはいつもクラスで見ている笑顔だった。

その場を通り過ぎたお婆さんは当然僕の方に近付いてきた。僕はお婆さんとお婆さんの後ろの二人とを見比べ、いずれは二人もこう歳をとるのだと思った。しかしその実感がいまいち湧かなかった。人生は連続的な物ではなく断片的な物と感じてならなかった。人の一生が続いているなど上手く想像ができない。自分が歳をとり、おじさんを経てお爺さんになる姿も想像つかなかった。僕はこのままこの姿で生き続ける気さえしてきた。

足元に落としていた視線を上げると、お婆さんはもうすぐそこまで来ていた。よく見るとお婆さんが乗っていたのは電動車椅子だった。

右のレバーだけで操作しているようで、体全体が車椅子を伝った地面の凹凸により不規則に揺

れていた。

揺れのせいで被っている帽子が少しずつずれて、落ちてしまふんじゃないかと心配になった。僕は先の二人に倣って、端の方に寄り歩みを止めた。目を逸らさず、お婆さんの顔をじつと見つめていた。

不意にお婆さんがレバーを手前に引き、車椅子の動きを止めた。

僕は不審に思いながらもお婆さんから目を逸らさなかつた。お婆さんの方もたつぷりと皺を蓄えた目で僕を見ていた。

「お兄さん、ありがとうねえ」

お婆さんの口から出た言葉は意外な物で、僕は瞬間、張っていた気を緩めた。途端にお婆さんの目も優しい印象を抱き始めた。

お婆さんは更に言葉を続けた。

「さっきの二人もそうだけど、若い子は優しいねえ。私が通ろうとすると、道を譲ってくれる」
口元から溢れ出る笑みを零しながらお婆さんは言った。

「あ、いや……ありがとうございます」

褒められることに慣れていない僕は戸惑いながらも、微笑み返した。ぎこちない笑顔になっているだろうな、と思いつながら必死で口角を上げた。

「それじゃ、私は行こうねえ」

レバーをぐっと倒し、車椅子がゆつくりと動き出した。すれ違った後、お婆さんはやはりこち

らを振り向き深々と頭を下げた。会釈という言葉で済ましてしまうのが勿体ないほどに、感謝の念を感じた。

僕はお婆さんの方へ向き直り、軽いお辞儀をした。上体を上げると、お婆さんは既に前を向き、車椅子の揺れに身を任せていた。

僕はふと、もし道を譲らなかつたならばお婆さんは一体どんな反応をしたのだろうと気になった。

少し考えたところで、どうせ僕にそんな事は出来ないし気付き、考えるのを止めた。もし僕に一抹でも勇気があれば、いや、勇気というよりは自分の我を通す力があれば、こうやって傘をさす二人を眺めながら歩くことも無かつただろう。

僕が自身の弱さを嘆く回数を数えるには、もう両の指だけでは足りなくなっていた。

眼下に広げた両手に、雨粒が小さい音をたてて落ちた。

二人は交差点の横断歩道の手前で立ち止まっていた。どうやら彼らの帰り道は反対側の歩道の方らしい。

対して僕はそのまま直線に進むため、二人の後ろを通る必要があった。気後れしたものの、背後を通る事すら出来なくてどうするんだ、と僕自身に言い聞かせ、道を変えずに二人の後ろを通る決意を固めた。

二人との距離が縮まるにつれ決意が鈍りそうだったが、拳を強く握りしめ、強い意志を視覚化した。

頼りない拳だったが、今の僕には十分だった。

信号が青に変わるのを、談笑しながら待ち続ける二人。顔を見合わせて話す様はひどく楽しそうに僕の両目に映った。

僕と二人の距離が十メートルほどに迫った時だった。

突然吹き付けた強い風が、二人がさしていた傘を飛ばした。男は手から離れた傘を慌てて追いかけた。

「龍二！」

佐々木志帆の叫び声は、耳をつんざくほどの甲高いブレーキ音によってかき消された。

傘を掴もうと道路に飛び出した男は、トラックに轢かれた。

勢いよく吹き飛ばされ、元の形を留めていない男の体は雨に濡れた路面を転がっていった。

「龍二！」

今にも泣きだしてしまいそうな声で再び男の名を叫んだ佐々木志帆は、道路に飛び出し、倒れている男の元へ駆け寄った。

あまりの悲惨さに、男から離れた所で立ち止まっている。近付こうにも怖いのか、足を踏み出したり後ずさりして立ち往生している。その内に膝から崩れ落ちた。こちらに背を向けているため顔は見えなかったが、肩を震わせていたので泣いているのだろうと思った。

僕はどうしているのかわからなかった。頭は冷静だったが、何をしたらいいのか分からずにその場から動けなかった。ふと、立ち尽くすのは今日二度目だな。と、先刻の玄関口での佐々木志

帆とのやり取りなんかを思い出していた。

数十メートル先で停車したトラックから作業着を着た中年の男が降りてきて、顔色を失った顔で駆け寄った。

自分が轢いた男を見下ろし、口を開けたまま呆然と突っ立っていた。突如我に帰ったようにスマホを取り出し、電話をかけた。救急車を呼んでも無駄だろうというような絶望の顔のままで。

電話の後、男は佐々木志帆の元へ近付きしゃがんで声をかけた。男の顔から察するに佐々木志帆はまともに話のできる状態ではないようだった。

僕はまだ自分が何をすべきかを探し当てていなかったが、男と彼女の方へ歩み寄った。それは使命感ではなく、単純な好奇心だった。

彼女がどんな表情をしているのか興味が湧いた。

しかし僕の興味は彼女の顔よりも、言葉の方に注がれた。

僕は顔を確認しようと、彼女の手前の方まで回った。予想通り涙を流しながら、苦悶に満ちた表情をしていた。距離が近かったため、自然と声も聞こえてきた。彼女が発した言葉は、僕に大きな衝撃を与えるのに十分な材料となった。

「私のせいだ……」

か細い声。周りの車の走行音でかき消されそうなほどに小さな声だった。しかし確かにそう言った。聞き間違いかとも思ったが、そんな疑惑は彼女の次の言葉で無くなった。

「私が悪いんだ……」

同じような意味ととれる言葉を彼女は二度言った。もはや僕は事故など忘れ、彼女の次の言葉に全神経を注いでいた。

「私が、傘をささそうって言ったから……。大して降ってないのに、傘をささそうって言ったから……」

倒れたまま動かない男を見た。

「龍二は……」続く言葉を言えずに、彼女はまたもや泣き出した。

彼女の言葉を聞いて、僕は学校の玄関口での二人のやり取りを思い出していた。

傘をささそう、と男を誘う彼女。しぶる男。強引に傘をさしだし、結局傘をさしながら歩き出す二人。

確かに、あの時の雨は小降りだった。傘をさす必要のないほどに。それでも相合傘を強要したのが為に、男が死んでしまった。そう言いたいのだろうか。

「私が、龍二を殺した……?」

いくらなんでもそれは暴論だろう、と思った。

確かに彼女は相合傘を強要したが、傘が風に煽られ、それを追いかけて男が死んだ事は直接彼女の責任にはならない。

周りを確認せず道路に飛び出した男が悪いし、なんなら風のせいにする事だつてできる。自然に責任を求めても仕方ないが。

「私が無理やり傘をささそうって言ったから、龍二は死んだんだ……」

「私が龍二を殺したんだ……」

僕の思考とは反対に、彼女の考えは悪い方へと傾いていった。

それならば、と僕は思った。君のせいであの男が死んだとして、君はどうするんだ？と純粹な疑問が湧いて出た。

「それで、君はどうするんだ？」

驚いた。口に出すつもりなどさらさら無かったのに。

今のは本当に僕の口から出たのか？と自身を疑った。しかし彼女とトラックの男がこちらを見ていたから、きつと僕が言ったのだろう。

「私は……」

地面に座り込んだまま下を見つめ、困惑の表情を浮かべた。

「龍二のいない世界に未練はない」

ドラマでしか聞かないようなクサイセリフだ。僕は思わず頬が緩んだ。

「それに、こうする事で少しでも龍二の償いになるのなら……」

困惑した表情は変わっていないかった。しかし、涙はもう止まっていた。

「私も死ぬ」

言い終わって、彼女はゆっくりと立ち上がった。

やめろ、とトラックの男が叫んで止めようとしたが遅かった。彼女は反対車線に飛び出し、自ら車に突っ込んだ。

鈍い音がして華奢な体が宙を舞った。

仰向けに道路に倒れた彼女は、穏やかな笑顔をしていた。それはさつき男と話していた時に見せていた笑顔と同じだった。

倒れて動かない男と女。血のついた傘だけが風に揺れて転がっていた。

昨日まで降っていた雨が嘘みたいのに、どこまでも青空が広がっていた。僕は車椅子を押しながら、照り付ける日差しに顔をしかめた。

「佐々木さん、今日はどこまで散歩に行きましょうか？」

僕は車椅子に乗る彼女に声をかけたが、返答は無い。無理もないだろう。下半身不随で、脳にも障害が残っているのだから。

医者は脳には何の異常も見られない。と頭を悩ませていた。何か心理的に大きなストレスを受けそれが原因となっているのかもしれない、とだけ言っていた。

施設には彼女のために月一回セラピストが訪れるが、未だ効果は出ていない。

「今日は暑いですね、日傘さしましょうか」

そう言っただけで僕は傘を広げて彼女を影に入れた。彼女の目は僕が持つ傘を捉え、怯えたような表情を浮かべた。

僕は慌てて傘を閉じ、口元の微笑みを抑えた。

晴れ渡る青空の向こうを雲が覆っていた。



詩部門

最優秀賞

陽炎の意志

田中 直次／53

奨励賞

真夜中のブルーライト、

冷めた空白

浅瀬 小夜／58

寝台あるいは墓地

神戸 要人／61

スプリント

荒井 青／64

いまのままに

宮太 星治／66

ありのまま

富里 千紗／69

*

*

詩部門

最優秀賞

陽炎の意志

田中 直次

キャンプシュワブの
米兵の雄叫びは
プレジデントへの歡喜の
メッセーじか
ビールのはらは
希望と失望の
欠片となって
彼らの「自由」の
空間に飛び散る
ホテルのゴルフ場から

黄金こがねのボールを

大浦湾に打ち込む

欲にたかる

芝生に映る

太った影たちが

固まって

大口開けて

笑う

六十年前の

過去の血の呪いは

解けた

変節の勝者の

歓楽の村となった

バーの残骸を

なつかしみ

もう一度

あの誘惑がほしいと

闇に隠れて

集落を這いずる

忍び寄る足音

黒い思惑を

乳飲み子のミルクと

村の未来へ

たつぷりと

注ぎこむ

陽炎の中から

現れる

「帝国」の使者

この海に

巨大な化け物を造り

海の心臓に

槍を刺す

朝日を

ジュゴンとともに迎え

たたきつける

太陽の光線をあびる

たたかう意志は

溶けだしそうな

アスファルトに

射てられて

じつと座り込む

カシヤ
九七年を生きた

おぼーの

ジーファーの光を

深海が

吸い込み

太古の珊瑚を

やさしく包む

長者の証の
風車をかざぐるま

老いたハジチの手で

天に突き上げ

潮風で

クルクルと

クルクルと回し続けた

詩部門

奨励賞

真夜中のブルーライト、冷めた空白

浅瀬 小夜

午前三時、雲ひとつない空
カーテンの隙間から月灯り

照らされた寝ぼけ眼を擦って、ブルーライトが部屋中に散らばる

I D .. @ X X X

P W .. * * * * * * * * * *

「もう一度ログイン」

または

「新しいアカウントを作成」

▼ログイン

※このアカウントは存在しません。

※入力されたパスワードは正しくありません。パスワードを忘れた方はこちら。

----- ✂ キリトリ線 ✂ -----

あちこちに脱ぎ捨てられた服

UFOキヤッチャーの戦利品が床に転がり

複数の虚無の存在と目が合つて心が震える

僕は誰とも繋がっていなかった。初めから。SNSのフォロワーも、みんなそれぞれ壁一枚の孤独の盾で塞いで。互いに傷つき、傷付け合つたと思つたら、うなずき、舐め合う、うわの空。僕はその時どうすれば良かったんだって、僕の居場所はどこにもなかったんだって！！！ありもしない過去に何度も打ち拉がれて。今更僕らをかawaiiそうだなんて誰も思わないし、だげどまだ何処かで目に見えないなにかを求めている、探している、僕がいる、だから

・・・わからない、わからない!!!

見るも無残に乖離した僕らは、

お互いの安否を知ることもなく

無言で彷徨っている

伸び続ける生命線に逆行して、

透明になつていく背中

闇に溶けたあなたは、

僕の瞳の奥に焼き付いて離れない、

から、おやすみ。

午前五時、アラーム音

僕は朝焼けが消えて

部屋の片隅に刻み込まれた

静かな夜明け

詩部門

奨励賞

寝台あるいは墓地

神戸 要人

ここに私を置いておいて

私はここに置いておかれて

寝ているのか、気を失っているのか

時間を失っているのか、何かに祈っているのか

寝台の上に私ひとり。

トンネルを通る時みたいに

まばたきしたら過ぎる夜の暗やみ。

ただ過ぎればよかったはずだった

息を止めていたあのときみたいに。

台の上には私はひとり。

ありきたりの苦悩を抱えて横になって
何も分からないまま、ただ待っている。

道端に捨てたはずの花束を見つけて

今になって机の上に飾っている。

今が一番素敵なもので溢れているはずなのに
どうしてか体は動かない。

こんなにも素敵な私たちと色があって
あなたもちゃんとここにいるのに。

雨が降った部屋で今日も楽しんでいるのに

どうしてか体は動かない。

しなきゃいけないことなんてひとつも無いのに
体はちつとも休まらない。

もうとうに終わるはずだったテープの続きを
無理に延ばして、そこには何も写らない。

心臓から漏れ出した苦みが

頭蓋から溢れ出した光が

目蓋を閉しても届く明かりが

このハコの中で半端に混ざるから

私にはどうしたらいいかがわからない。

詩部門

奨励賞

スプリント

荒井 青

九月の北を掠めるゆいレール二番線は、裂傷を胸に押し打って古島駅へ到着した。ササミを解すような仕草で駅員さんは俺の舌先に釘を差す——OKIKA、ポイントがもう貯まる貯まる。情緒はIQの低い俺へ、神様が配慮して与えてくれた罫線、或いはテロメアのあるCtrl+Z。ダサすぎた今日のあれ、何だあれ。

死汗を口につけ啜れ 殞はまだ終わらん
哀しみの頬をふにふにしてろ

遠いゴールを目指すなら、全力で走れ。アキレス腱を伸ばしてコースを見る、蛾の幼虫が大量発生したとかで丸坊主にされたホウオウボクが沿道で手を振る。羽ぬけ鳥が変なうちわ

を掲げている。時間軸と認知が発する得体の知れない、屁にもサガリバナにも似たガスが、
ダサ過ぎて目も当てられない駅に充満する。不健全で不衛生な黄色い線のギリギリに指を置
く。

腐っていく様を見届けろ 共に眠れ

哀しみの頬をふにふにしてろ

じゃなくて、そういう重いのは持つてくるなよ。

決して欠かすな、欠かすことすらも欠かすな。息切れしてからが本番だ。便座の冷たさも
痺れる脇汗も、何一つとして欠かすな。出血多量のままで号砲を待つことを、特別可哀想だ
と思うな。亡した物をホーム前のゴミ箱に捨て、同位相のげっぷを見ろ。靴紐結べ、シンプ
ルに見苦しい日々から伸びる百m先へ俺は俺は俺は俺の指筋がキュツとなる。

詩部門

奨励賞

いまのまに

宮太
星治

いまのまに
麦秋が終わり

いまのまに
際涯を見る

蜉蝣の生涯に
涙を振るい
漠漠たる
隔世の心に

白昼夢を見る

炎靄に鳴る

鏘々然に

白白たる

残喘を知る

超新星の光に

憧憬し

超空洞の常しえに

邯鄲の夢を見る

いまのまに

霜に侵され

いまのまに

枯槁する

薄暮に独白し
恬然と眠る

青き甘酸を
なつかしき
己の暗澹に
寞寞たる

嵐の前の夜の
故郷を偲ぶ

いまのまに
俗世に

閑古鳥が鳴く

詩部門

奨励賞

ありのまま

富里 千紗

綺麗な涙だな

彼女が流す涙は

まるで、素直さと優しさに色を付けて

透明なガラスの中で混ぜたような

その涙で

綺麗な虹が架かると思ってしまうような色

私の涙は汚れている

まるで、ぐちゃぐちゃした感情に色を付けて

でこぼこの缶の中で混ぜたような

泥でできた水溜まりのような色

だから私は恥ずかしくなつて

涙のタンクに蓋をした

一滴だつて出て来れないように鍵を掛けた

嫌われるのが怖いから

一人ぼっちになりたくないから

心の中が叫んでいる

もう無理だつて言っている

ポタ

ポタ

ポタ

鍵を掛けたはずのタンクは

いとも簡単に崩壊した
溢れ出す私の涙を見て、
彼女は言った

「君の涙は綺麗だね。」



短歌部門

最優秀賞

ジヨバンニ

前原 真弓／73

奨励賞

シン・ママ

外田 さし／74

岸を境に

安 堂／75

蟲毒

葬 ヤマメ／76

庭に水景物のあるレストラン

奥間 空／77

傘寿の友へ

本村 隆信／79



*

*

短歌部門

最優秀賞

ジヨバンニ

前原 真弓

名歌集豊かな言の葉さやぐ森フィトンチッドを繰るたびに浴ぶ

遠景に海岸道路走らせて九月の風は滑らかに吹く

孫の守り終へて車窓に仰ぎ見る十日余りの月の笑みかな

言霊は今に滅びず寿命なぞ白物家電にゆめ語るまじ

貧困にいぢめにヤングケアラーにジヨバンニ『銀河鉄道の夜』

短歌部門

奨励賞

シン・ママ

外田 さし

半分はあなたで出来た生き物が私を母に育てています

笑うこと泣くことすべて捧げたい魔法みたいな人にへその緒

これが呼吸これが鼓動と腕のなか未来の音がちいさく響く

なんで？って飽きることなく訊くきみの小さな手には宇宙のしっぱ

すこしだけ離れてきみが転ぶのを立ち上がるのを眩しく見てる

短歌部門

奨励賞

岸を境に

安堂

海岸に並ぶ灯りと影の波風に吹かれる喧騒の声

月光と兎に重なる飛行機の影が僕らを点滅させる

引き潮に裸足の跡が交差してフラッシュだけが掻き消されない

太陽が真西に沈み夜が冷える靄に紛れて押し寄せる波

忘れてた夏の匂いと蝉の声ピザでも買って海へ行こうか

短歌部門

奨励賞

蟲毒

悪意とは夕映の川にそつと揺れ震え冷えゆく群れるタニシよ

溶け落ちる見知らぬ窓辺かげろうの硝子の川で蛾は溺死する

羞恥の「ち」尖る舌先やわらかい岩に抱かれて月に見られて

いない子の影を送れば光る貝せわしなく蝦淀みへ向かう

寒天の透明のように静寂でせつなさばかりすれ違ふ虫

葬
ヤマメ

短歌部門

奨励賞

庭に水景物のあるレストラン

奥間

空

OPEN

12 .. 30
17 .. 00

(ラストオーダー 16 .. 30)

全粒粉の

レーズンクルミブレッド

黒いスチールのパン籠に

つやめく

清楚な洋食器

庭に水景物のある

レストランの

山原豚肩ロースの

バルサミコとトマトと

赤ワインの煮込み

P M 1 .. 32

デザートの

横に置かれたシテイロースト

短歌部門

奨励賞

傘寿の友へ

本村 隆信

ペン先に小さな秋をひそませて傘寿の友へ里のことなど

コロナ禍のその極まりにイベントの人を見つける時心悲しも

ざわざわと風に揺らめく青甘蔗の光眩しむまなこ細めて

日本語の訛る響きをなつかしむ学友集ふ喫茶店にて

にひ年はまた恐ろしき変異株の流行り来るがに今も思ひつ



エッセイ部門

最優秀賞

おきあがりこぼし

堤

博美／81

奨励賞

演奏会と音楽葬

森山

高史／87

一日三食

山田

太郎／91



*

*

エッセイ部門

最優秀賞

おきあがりこぼし

堤 博美

「恩師〇〇〇先生の訃報に接しました。九十一歳という年齢の恩師の健康状態を心配していましたが、ついにきたかと胸に込み上げるものを感じました。第二次大戦に参戦。右の手は、二の腕から負傷し義手となり、左の手は親指と人差し指、中指がやつと使える、それも羊の筋を移植したとのこと。不自由な体で中学校の教壇に立たれ、私たちを三年間世話してくださいました。ただの一度も、戦争の犠牲になつた、と愚痴を言われたこともなく、他人のせいで不自由な体になつたのだと言われたこともありません。教え子たちが素直に育ってくれることを願って一生懸命に教えてくださいました。私たち子どもには体の不自由さも、負傷されて教壇に立てるようになるまでの苦労を想像することもできませんでした。(中略)私たちお世話になつた生徒は、先生の口から戦争の悲惨さ残忍さを聞かなくても、先生の姿を思い出せば理解できる大人になりました。また一人、戦争の大きな犠牲者が亡くなられました。」これは、私の父が他界して約三週間後の、熊本地方紙に掲載された投稿文である。

昨年七月四日、その父の十三回忌を迎えた。コロナ禍の中で、法要を行うかどうか迷ったが、父の法要としては最後になるだろうということで、子供や孫たちの身内だけの法要を行うことにした。法要は自宅で行い、いわゆるソーシャルディスタンスを意識し、マスクを付けての法要であった。母は、認知が進み、父の法要であるとの認識はなかったようである。法要が終わり、長姉が出してきたのが、この新聞記事のコピーである。父の死後、四十九日の法要の際に従姉からその記事を見せてもらったが、その時は、お父さんは生徒に慕われていたんだね、という程度で終わってしまった。今回は十三回忌ということもあり、長姉からあらためて見せてもらい、皆で父の思い出を語りあった。

父は、戦争で負傷して帰国した後、昭和十八年に母と結婚した。父は利き腕の右手を失い、左手も薬指と小指はまっすぐに伸ばすことができなかった。しかも、足も銃弾がかすめたということで、やや不自由な歩きだったという。母に父との見合い話があった時、「あそこには、おきあがりこぼしさんがいる。」という、父の姿をこのように噂するのを聞いて母は断ったという。今であれば、まさに差別用語である。しかし、仲立ちをした人の「戦争で名誉の負傷をして帰ってきた人を拒絶するのは非国民だ」という言い方に負けてしまったという。

投稿で、「体の不自由さ」も「教壇に立てるようになるまでの苦勞」も想像することも理解することもできなかった、と書かれている。父は、負傷後病院に運ばれ、数日間意識不明であった。目覚めた時にはすでに右腕がなかった。最初は腕がないことに気付かなかったという。右腕を何度動かそうとしても、腕が上がらない。それで左手で触ろうとして初めて気づいたらしい。その

衝撃は口で表すことができないと言っていた。右腕がないことを知った後も、なかなか受け入れることができず、物を取ろうとして思わず右手を出そうとしたことが何度もあったらしい。冬の寒い時の切断部分の痛みは、私が中学生の頃まで続いた。痛みをこらえる父の姿を見るのはつらいことであった。

腕を失ったために、父は、外ではいつも義手を着けていた。夏場も長袖のワイシャツを着ざるを得ず、当初の頃の義手は子供には持てないほどの重さがあり、父は、いつも汗をびっしょりかいていた。夏に義手姿の父と外出するのはつらかった。じろじろと好奇の目で見られるからである。もつとも、大人になって思ったのは、何故自分はずらいと感じたのだろうか、何故父を誇らしいと思ひ、相手を見返してやらなかったのか、ということである。ただただ父に申し訳なかったと詫びるばかりである。

父は、結婚後、姉が生まれて間もなく、働いていた職場を退職した。職場内のいじめによるものである。今でいうパワハラである。当時の父は、左手の中指も十分伸ばすことができなかった。したがって、与えられた仕事は完全でなかったり、人より遅いことがあったようだ。上司からは、「給料分くらい仕事したらどうな。あんたは給料どろぼうたい。」と言われ、同僚からは、「傷痍軍人の恩給で食べていけるけん、無理して働かんでよかたい。」と言われ、ある日、無神経な言葉に耐え切れず、上司と衝突し退職したということである。とはいえ、母は、乳飲み子を抱えて途方に暮れたらしい。

父は、それから一念発起して、師範学校に行くことにした。二年間とはいえ、父としては、母

や生まれたばかりの姉のためにも必死で頑張らざるを得なかったのである。必死で勉強を始めて間もなく、父は虫垂炎になった。以前から右下腹部に違和感を感じていたらしいが、勉強するために我慢していたらしい。それが災いして、医者に診てもらった時には、腹膜炎を起こしていた。当時、医者からは、危ないと言われ、冷やすしか方法はないと告げられたのである。当時冷蔵庫はなく、母は、かき氷屋で氷の塊を買ってきて、一晩中冷やしたという。そのかいあって、父は回復した。母は、「今度も命が助かった、運に恵まれとる。二度も助かった命だけん、頑張らんと。」と言つて父を励ましたという。母の励ましのおかげか父は猛勉強をして、師範学校を無事卒業したということだ。「おきあがりこぼし」と差別的な言い方をされた父は、ここで良い意味の「おきあがりこぼし」の本領を発揮したのである。

父は卒業後、中学の教師として活動することになる。父は差別のない職業として、教師を選んだが、ここでも差別はあったのである。言葉による差別の内容は前職の時とあまりかわらなかつたようだ。ただ、大学生になつた私には、目に見えない差別、人事上の差別があつたように思われた。一つは、勤務校である。父は、問題の多い学校ばかりだなあ、という程度で、差別とは思つていなかったようである。しかし、他の教師の異動の動きを見ると、私には差別以外の何物でもないと思われた。二つ目は、退職まで平教師であつたことだ。父は曲がつたことが大嫌いで、何より融通が利かない人であつた。また、およそ教頭や校長等への忖度ができない人であつたから、あるいは管理職としては不適切ということだったのかもしれない。ただ、さすがに後輩が教頭や校長になるのを見て、一時は悩んでいたようだ。しかし、私は、父が生徒と接する姿が一番好き

だった。ある時、私は、父に言った。「僕は、生涯一教師のお父さんを尊敬しているよ。」と。だからでもなかるうが、その後退職まで父の悩む姿を見ることはなかったように思う。

投稿者の中学校は、小さな農村部にあり、大半の生徒たちは卒業すると、農業に従事することになる。そのような中で、高校への進学を希望し、その力もあるが、親が許さないという家庭もあった。父は、その生徒を進学させてもらえよう何度でも足を運んで親を説得していたという。また、その頃は中学を卒業しても就職が難しい時代であった。そんな時、父は、自らいくつかの会社を回り、生徒の就職を頼んでいたという。このような父を見ていたからであろう。父は、ある事件で、生徒たちの親に助けられることになる。クラスの一部の生徒たちが、一人の他の生徒に対し、暴力をふるったのである。この生徒は、ボス的な存在で、これまで、何人ものクラスメートに、度々暴力をふるっていたために、耐えかねた生徒たちが仕返しをしたのである。しかし、このボス的な生徒の父親は、学校に乗り込んで来て、校長に生徒たちと担任である父の処分を迫ったのである。校長は、事態収拾のために、父が辞職する方向で話を進めた。この事を知った親たちが、父を辞めさせるのであれば、自分たちの子供は学校に行かせない、と校長に申し入れをしたのである。その結果、父は辞職を免れたという。ここでもまた、「おきあがりこぼし」は、起き上がったのである。

父は、定年を待たずに退職した。教育に全身全霊を傾けてきただけに、躰は悲鳴を上げていたようだった。退職後は唯一の楽しみ、詩吟をうたい、庭いじりを楽しんでいた父が、胃に違和感を感じたのは八十九歳の時である。元々酒をたしなまず、煙草も退職後止めており、食べること

だけを楽しみにしていた父の食欲が急に落ちたのである。近くのクリニックでの診察の結果は、胃癌であった。癌は相当程度進行しており、手術をしても果たしてどの程度寿命が延びるか疑問であるとのことであった。家族で相談して、手術はせず、総合病院に入院しての治療ということになった。入院当初はある程度食べることができたが、だんだんと食べられなくなつた。また、父は薬についての説明を求め、十分な説明がないと、「服薬を拒否します。」と言つて薬を飲まないこともあり、ベッドでの用足しを嫌がり、トイレでの用足ししかなかった。それもあつてか、父の容態は悪化して行つた。そんな中で、せめて少しでもおいしいものを食べさせてあげようということで、胃と腸を直接つなぐという手術をすることになった。しかし、手術前に肺炎にかかり、手術ができなかった。肺炎が治癒してからの手術という予定だったが、その間に癌が進行し、父の苦痛は相当なものだった。父には今こそ「おきあがりこぼし」の本領を発揮して欲しいとの期待もむなしく、モルヒネを使用して三日後に息を引き取つた。

父は、死ぬ間際まで母の心配をしていた。その母は、せめてお父さんの一周忌までは生きていたいと言っていたが、昨年の十三回忌にも出席し、今年満一〇二歳になった。父の「おきあがりこぼし」は、母に引き継がれたのだと感じている。

エッセイ部門

奨励賞

演奏会と音楽葬

森山 高史

上の妹が五十九歳になったとき、一年後に還暦記念のイベントをしようと盛り上がった。家族演奏会を開き、録画して、DVDに残そうとまで決まった。妹のいる福岡に集まるので、沖縄で暮らす私たち夫婦も、予定を合わせることにした。

妹は本職のミュージシャンで、ピアノとシンセサイザーの奏者だった。テレビの「のど自慢」で伴奏をすることもあり、腕は折り紙付きだ。義弟も、数年前までは、地元のサクソ奏者だった。この二人がいれば、どうなるうとも形にはなる。

私の古いギターは、弦が錆びびついている。しばらく触っていなかった。早速、新しい弦に張り替えた。下の妹は、小学六年でピアノに挫折した。広がる一方の姉との差に、嫌気が差したからだ。それでも練習すれば、演奏会にはなんとかなる。問題なのは母と妻だ。戦力外ではあるが、必ず参加してもらおう。いざとなれば、鈴とかマラカスを持って、立つてくれるだけでもよい。家族全員参加が絶対条件だった。

沖繩と福岡で、曲の選択に入った。ビートルズの「アンド・アイ・ラヴ・ハー」を提案すると、妹たちもすぐに賛成してくれた。ポール・マッカートニーが叙情的に歌うラブソングで、十代のころ、私の買ったレコードを妹たちも聴いて育っている。演奏会なので、せめて三曲は必要だろう。ほかの曲が思いつかない。合同練習は遠距離で無理なので、当日はぶっつけ本番になる。そのため、自主練習はしっかりやる。母や妻でも演奏に参加できそうな曲を探していた。

下の妹から緊急連絡が入った。上の妹に重大な病気が見つかり、入院するという。前回、酒の量がいつもより少なく、ほとんど食べていなかったことを思い出した。演奏会の話題は、その日から出なくなった。

しばらくして、妹は退院した。完治したわけではない。一時的な帰宅だ。福岡まで見舞いに行くと、様子が変わっていた。髪を帽子で隠している。薬の副作用のせいだろう。声も弱々しかった。とても、演奏会の打ち合わせなどできない。食事も、ほとんど摂らなかった。それでも退院したことで、楽観的に考えた。誕生日までに元気が戻れば、楽しみにしている演奏会が開ける。還暦祝いには、予定どおり全員で集まりたかった。

しばらくは連絡がなかった。こちらからは何も聞けない。ほろ酔いでギターを抱え、「アンド・アイ・ラヴ・ハー」を歌ってみる。演奏会ではヴォーカルは入れず、義弟のサクスをメロディーにしたい。ピアノは本人にまかすとして、各パートの譜面を考えていた。みんなの演奏能力を越えないようにとの注文で、編曲は私の仕事になった。

夜遅く、妹が亡くなった知らせが入った。翌朝、妻と福岡に向かう。覚悟はしていたが、急だった。遺体はすでに、葬儀場の一室に運ばれていた。翌日まで、そこで家族と一緒に過ごすのだ。通夜の席で、葬儀は「音楽葬」になると聞かされた。死んだ妹の意向でもあったようだ。どんなものか、私には見当がつかない。その言葉も、初めて聞いた。静かに送ってやりたいものだが、喪主は義弟だ。すでに、決定済みだった。

葬儀の日、祭壇に楽器がセットされた。ピアノやドラムも置かれている。本格的で、大がかりだ。演奏するメンバーは、妹の音楽仲間だった。「のど自慢」の画面で、見覚えのある演奏者も何人かいる。なにが始まるうとしているのか。にぎやかに送ろうという趣向なら、私は賛成できない。妹の顔は、穏やかだった。少し微笑んでいるようにも見えた。コンサートで着るような、ワインレッドのドレス姿で横たわっていた。妹の最期は、フランス人形のように美しく思えた。

宗教色のない葬儀だった。妹にお別れするために、大勢が集まってくれた。別々に暮らしていたため、私の見知っている参列者はいなかった。兄妹で、互いの生活のことには立ち入らなかった。ので、交友関係は分からなかった。

柩の妹に献花が始まると、演奏も始まった。どこかで聞いたことがあるが、曲名は分からない。クラシックやレクイエムではなく、映画音楽かミュージカルのナンバーに思えた。とても静かに、厳かに流れ、妹の哀しい死を実感した。小さいころからピアノに親しみ、妹は、それを一生の仕事にしてきた。音楽仲間が想いを込めて演奏し、妹をいま、送っているのだ。その調べの中で、

みんなそれぞれが、お別れの対面を済ませた。

参列者の献花がすべて終わり、壇上は演奏者だけになった。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」。最後の曲だった。妹が生前に頼んでいたのか、偶然なのか、その曲だった。もともと静かなゆつくりしたバラードだが、さらに落ち着いた演奏だった。メロディーは、サククスが担当していた。妹の仲間たちが、肃々と送ってくれた。

印象に残る素敵な音楽葬だった。素敵という言葉は違和感があるが、妻も下の妹も、火葬場の煙突から昇る煙を見上げて、そう言っていた。

家族演奏会ができなかった。楽しく還暦を祝うはずだった。妹の六十歳の誕生日まで、あと十八日だった。

沖繩に戻り、書きかけた「アンド・アイ・ラヴ・ハー」のパート譜を処分した。家族で演奏することは、もうない。一度だけ、妹の誕生日に当たる日、ギターも使わず歌ってみた。最後まで歌えなかった。

エッセイ部門

奨励賞

一日三食

山田 太郎

一食目

へびいちごをご存じだろうか。いちごの一種だが、放置していても一帯を緑で覆ってしまいうほど繁殖力が強く、春になると小ぶりで真っ赤な果実をつける。このへびいちごは毒があり、親は子供が食べてしまわないように注意する。しかし、毒があるというのは俗説で、本当は毒などない。おぎゃあと生まれて五年の私は、それはもう食いしん坊で食欲が元気のバロメータであった。保育園では毎日のようにおかわりをして、少しでも食欲のない日には、「太郎くんが給食を残しました。今日は体調が悪いかもしれないですね。」と連絡帳に書かれたものである。体力が有り余って仕方なかった子供の頃、夜におとなしく寝るはずもなく親にずっと話しかけていた。ある夜、私が「おかあさんのしょうらいのゆめは？」とたあいの無いことを聞くと母は言った。

「ゴリラの飼育員、その夢はもう叶ったよ」

そんなゴリラのようにたくましかった私にも食べられないものがひとつだけあった。それがへ

びいちごである。今でこそへびいちごには毒がないと知っているが、幼き私は毒があるものなぞ食うものかと思ひながら、赤くて甘そうなへびいちごを横目に登園していた。

ある日のことだ。私の耳に驚きのニュースが飛び込んできた。へびいちごを食べたという猛者が表れたのである。それを食べたのは、保育園で働いていた調理員さんだった。

「小さいけどおいしかったよ」と調理員さんは言う。

「毒は？だいじょうぶなの？」

驚きと尊敬の念をこめて私は調理員さんを見つめた。

「なんともないわよ。へびいちごを食べたら記憶力上がったし、腰痛も治ったわ！」

これは幼き私にとって、コペルニクスの転回であった。毒があると言われているへびいちごが良い効果を及ぼすとはこれいかに。しかし、へびいちごを食べてはいけないという固定観念はなかなか消えず、ついぞへびいちごを食べることなく卒園式を迎えた。

時は巡り十五年後、大学生になり私は日々課題に向かって七転八倒している。調理員さんは私のことをからかって冗談を言っただけかもしれないが、「へびいちごを食べて記憶力上がった」という言葉が忘れられず、あるときへびいちごを食べていれば……と何度も後悔の念が押し寄せる。

二食目

私は三年ほど、北海道は遠別町にいた。日本最北の稲作地帯である遠別町は海沿いにあり、冬は冷凍庫と同じ気温になることもあった。加えて、海風によって体感温度はぐつと下がる。札幌

からバスで四時間もかかり、何もないところの真ん中という言葉がぴったりの場所だった。

北海道に住んでいるからには、やってみたいことがあった。それは、雪でかき氷を作ることである。ふかふかの新雪にかき氷のシロップをかければ、かき氷がたくさん食べられる。この天才的なアイディアを友人に話すと、「雪は汚いよ」と一刀両断されてしまった。しかし、あきらめきれぬ私は真冬にアイスを買ってくることを決意した。朝早く起きて、仕度をする。町にコンビニは二店舗しかない。一番アイスの品ぞろえが良いコンビニに行くことにした。ダウンコートフードを目深にかぶり、雪靴を履いて除雪されたばかりの道を踏みしめる。無尽蔵に雪の降る小さな町は、スノードームのようだと思ふ。皮膚が露出しているところが針で刺されたかのように痛い。北海道の方言で、寒いことを凍れるしほというが、本当に真冬の北海道は凍つてしまいそうなくらい寒いのだ。コンビニにつくと暖房の熱気が体を包み込む。好きなアイスを一箇選んで、会計をすませた私の興奮は最高潮であった。阿保らしいことをするのは楽しきかな。コンビニからの帰り道、アイスを袋から取り出し、食べようとした五秒後に私は後悔することになる。

アイスの冷たさは私の知覚過敏を襲い、吹雪は人間の都合などお構いなしに激しさを増す。内側からも外側からも攻撃されている状態だ。しかし、アイスを食べるのはやめられない、私はやってみたいことをやりととおすという信念をもって、真冬にアイスを食べているのである。がたがた震えながらアイスを食べ終えたころ、暖房の効いた家に着き、ストーブのまえで二度とこんなことはするか！と私は誓った。

人間は忘れる生き物である。辛いことを忘れるからこそ、前を向いて生きていくことができる

のだ。今では、真冬にアイスを食べた数年前のことが懐かしく、もう一回くらいやってもいいなと思うのであった。

三食目

名桜大学に進学した私に待ち受けていたのは、新鮮でおいしい野菜や果物だった。家から20分ほど歩くと産直市場があり、さまざまな生産物が並んでいる。マクワウリ、グルクン、ジーマミー豆腐など初めて見る食べ物がたくさんあった。私は、紅芋を沖繩に来て初めて食べたのだが、甘くてねっちりとした食感が病みつきになり、一時期の主食が紅芋だった。蒸した紅芋をつぶして片栗粉を混ぜ、平たい丸に成形した生地をフライパンで焼くと、北海道の郷土料理いもちになる。また、片栗粉の代わりに小麦粉を入れてゆでると、パスタの一種であるニョッキの完成だ。フライドポテトのジャガイモ代わりに紅芋を使ってもおいしい。産直市場は、季節を感じられてたのしい。今は、島バナナとシークワサーが陳列棚にたくさん並べられている。つい先日、シークワサーでジャムを作っていて、高校生の頃を思い出した。冬至が過ぎると、庭でとれた柚子でジャムを作っていたのだ。高校の恩師はパンを作るのが上手で、焼き立てのパンを食べ盛りの生徒に配っていた。シンプルな食パンと甘酸っぱい柚子ジャムはよく合う。きつとシークワサーのジャムと一緒に食べてもおいしいだろう。想像するだけで垂涎ものだ。

不思議な縁もあるもので、恩師の息子さんが名桜大学の卒業生だった。恩師は今でもなにかと気にかけてくれて、連絡してくれたり、息子さん経由でおいしいものを送ってくれたりする。新

型肺炎の流行から、早二年が経った。高校の恩師に直接お礼を言える社会になることを、願わずにはられない。



俳句部門

奨励賞

小鳥来る
男子の目
十七歳 夏俳句

本村	隆信	97
外田	さし	98
福井	聖來	99



*

*

俳句部門

奨励賞

小鳥来る

本村
隆信

沖繩忌田周率の桁のほど

小春日やシーサーの顔みな快し

規制して不発弾処理春の道

潮時の婚の知らせや小鳥来る

ふかぶかと機窓一面雲の峰

俳句部門

奨励賞

男子の目

外田 さし

桜桃忌運動場で怒鳴らるる

風薫るギプスの悟空羨まし

夏河の尻のあたりで丸くなり

膝をつくときの地球の固さかな

昨日より港のほうに蝸牛かたつむり

俳句部門

奨励賞

十七歳 夏俳句

福井 聖來

金網を越えて飛び込む夏の空

アイス食べ入道雲に監視され

網とかご夏の足音追いかけて

窓閉めて夜よ逃げるなど夏休み

校舎裏もつと鳴けよと蝉時雨

選評

小嶋 洋輔

小説部門 エッセイ部門／101

玉代勢 章

小説部門／108

あずさゆみ

小説部門／112

西原 裕美

詩部門／115

吉川 安一

エッセイ部門・詩部門・短歌部門／118

屋良健一郎

短歌部門／121

おおしろ建

俳句部門／126

小番 達

エッセイ部門／129

波照間永吉

琉歌部門／132

照屋 理

琉歌部門／134

*

*

第二回名桜文学賞選考経過及び選評

【小説部門】

小説というジャンルについて

小嶋 洋輔

第二回名桜文学賞は、応募期間を二〇二一年九月六日から十月八日までと設定、結果十四編の小説作品が寄せられた。その小説作品を、選考委員三名で審査し、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

- 選考委員…あずさゆみ（作家）、玉代勢章（小説家・文芸評論家）、小嶋洋輔（名桜大学教授）
- ・ 十四編の小説を選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
 - ・ 十二月三日（金）に沖縄産業支援センターで、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。
- そして審議の結果、奨励賞二編、とした。

昨年の倍以上の応募作に喜びつつ作品を読んだが、その喜びはいつしか不安へと変わった。今回の選考委員会は難渋するかもしれないという不安である。そしてその不安は現実のものとなった。

なぜ応募作を読み進める内にそのような不安を抱いたか。それはまず、今回のいくつかの原稿で完成稿とは思われないミスが多く見つけたからである。誤字脱字などの単純なミスは推敲の段階で無くして欲しい。また、本賞「応募要領」も遵守して欲しい。選考委員も一読者である。単純なミスはその読書体験を阻害するものとなる（これはミスではないが、手書で応募する際はできるだけ大きな文字で書いて欲しいという要望も出た）。

そしてもう一点は、今回の選評のタイトルとした小説という表現ジャンルをめぐる問題といえた。小説とは何か。講義等で私はその定義からはじめるのだが、「近代日本のシステムに則った社会を舞台とし、そこに生きるわれわれ読者と同じ一個人が主人公であり、その感情の揺れ動きをリアルに日本語で描写したもの」としている。この長い定義にも軽重があり、最も重要な部分は「一個人が主人公であり、その感情の揺れ動きをリアルに」描くという点となる。とくに「純文学」とグループピングされる作品群はこの部分を重視している。小説家とは別の人間である、主人公の感情の動きを描写するには、その主人公をしつかり客観視できていなければならない。「この状況下では、この人物はどう感じるのか」、この問いについて多くの小説家たちが自身の小説論で語ってきた。小説とは、生きた人間を創作する行為なのである。

この点に不足が目立ち、今回最優秀賞を出すことができなかつた。ここからは、奨励賞となつ

た凛藤海「化生」、瀬名波克弥「傘、舞い散る」の二作について述べる。選考後に明らかになった応募者のプロフィールによると、若い書き手のようである。この評が、応募者の今後の創作活動でいくらか足しになることを願って記させていただく。

「化生」は今回の応募作の中で最も生きた人間を描いていた作品である。母にふるわれる父からの家庭内暴力、その暴力に対し何をすることもできない自分。この際の主人公蕾の感情をこの作家は「もどかしくて、背中が痒いとすら思う」と表現する。このようないわゆる「適切な表現」は、本作中他にも見られた。いわゆる軽い男子学生の描写も上手く、そうした軽い男子学生に蕾が抱く「気持の悪さ」の描写もまた上手かった。

しかし、というか、だからこそというか、結末へいたる主人公の感情をもつと念入りに書く必要があったのではないか。ある種、母娘の密着した共同体から、母とは異なる同性への密着への移行という結末なのだ、なぜそうなったのかが判然としない。それは、蕾から母への感情描写が少ないこと、桜という人物の書き込みが不足していることに要因があるような気がする。こうした部分、たとえば漫画というジャンルであれば、絵による表情描写で足りる。小説はそうはいかないのである。

次に「傘、舞い散る」である。意図してそうなったわけではないが、カップルを見続ける追跡者となってしまった男子高校生が主人公の小説である。カップルを追跡している際の、主人公の目に飛び込んでくる風景描写を含め、主人公の内面描写は上手い。何を主人公が見ているかで、この人物の性格が良く伝わってきた。

やはり、しかし、というか、だからこそ、カプルの男が事故に遭ってしまったあとの主人公の性格とそれまでの上手く描けてきた主人公の性格とが、どうしても一致せず、唐突な変化に感じた。意図せず追跡者になってしまった自分を含め、外界を自虐的ではありながらコミカルに見ることができた主人公が、急に「サイコパス」になってしまったようにさえ感じた。前半部の主人公の性格のままであれば、事故の場面でどうしただろうか。そう思ってしまったのである。

最後に今回の応募作のなかで、惜しくも選外となった作品がある。「サージカルマスクの向こう側」だが、「これは小説なのか」という点で、もつとも議論になったので紹介しておく。「南海ドクターヘリ」の活躍を「実録」風に描いたこの作品は、豊富な医療の知識から来るであろう、リアルな描写に溢れていた。だが、そこに生きた人間が存在しないように見えた。主人公たちを写すカメラは、常に俯瞰的でまったく近寄ろうとしない。内面描写がないというだけではなく、登場人物の表情のアップすらカメラは写さないように読ませてしまった。これだけの筆力を持った作家であるから、その現場に生きる人間の内面をもつと描いて欲しいという声が上がった。

【エッセイ部門】

体験を客観的かつ主観的に描くということ

小嶋 洋輔

第二回名桜文学賞（エッセイ部門）は、応募期間を二〇二二年九月六日から十月八日までと設定、結果十二編のエッセイが寄せられた。その作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員・吉川安一（名桜大学名誉教授、詩人）、小嶋洋輔（名桜大学教授）、小番達（名桜大学教授）
・十二編のエッセイを選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・十一月二十九日（月）に名桜大学附属図書館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、とした。

今回のエッセイ部門は興味深く読める作品が多かった。著者自らの、まさに人生で一度という体験を文章化したような作品が多かったからである。そのため、逆にそのような貴重な体験なのだから、もっとじっくり書いても良かったのではないか、と思ってしまう作品もあった。「じっくり」というのは、この選評のタイトルにも書いたことである。エッセイに書かれる内容は書き手自身の体験であるため、主観的になることは当然のだが、その自身の体験をどれだけ客観的

に見ることができているかが「じっくり」書けているか、ということになる。

そのような視点でもって選考し、最優秀賞を一編、奨励賞を二編、出すことができた。以下作品についてコメントしてゆく。

最優秀賞となった堤博美「おきあがりこぼし」は、ほぼ満場一致というかたちでの受賞となった。生前の父の姿を書いたエッセイということができるが、父の存在を著者自身が著者自身の中に落とし込む作業のように読めた。その作業を読むことでわれわれ読者も、生きた著者の父の姿をリアルに感じられた。また「おきあがりこぼし」というタイトルも上手かった。戦争での負傷による障がいや揶揄されて付された父のネガティブな名前「おきあがりこぼし」が、父の人生とともにポジティブなものに転化してゆく。それが端的に示されたタイトルのように思う。

奨励賞の森山高史「演奏会と音楽葬」は妹の死とその葬儀⇨音楽葬の様子を写したエッセイである。妹の死を見つめる著者の眼差しは客観的で、淡々としている。だからこそ悲しみが伝わってくるような好エッセイであった。だからこそ、もう少し「じっくり」書いて欲しかった。規定の枚数すべてを使って書き込んで欲しかった。それは感情をもっと細かく書くべきということだけではない。著者がその場で見た風景などの描写がもう少しあればと思った。

もう一つの奨励賞、山田太郎「一日三食」は面白かった。選考に際しこのエッセイへ私が付したコメントは「面白い」のみである。この面白さは、著者のモノの見方にある。それが文体にもあらわれているようだ。このようなモノの見方で、小説や詩というジャンルにも挑戦してもらいたい。だが、なぜタイトルは「一日三食」なのだろう。「一日」の意味がわからなかった。これ

に代表される言葉選びの雑さが、最優秀賞に推せない一因となった。

(こじま ようすけ／名桜大学国際学群教授)

【小説部門】

十四編の応募 ありがとう

玉代勢 章

一 奨励賞「傘、舞い散る」（瀬名波克弥。大学生）

実存主義の匂いが心地よく漂う優れた作品だ。欠点は……。一 哀しみ・寂しさなどを打ち出して主人公を魅力的に描いてほしい。また主人公の心理や性格の描写が弱いので事件の怖さ・冷たさが鋭く突き刺ささらない。二 「昨日まで降っていた雨が」以降の最終章は後日譚であり小説の緊迫感を壊している。

二 奨励賞「化生」（凜藤海。大学生）

物語の組み立て・展開・学友との交流はよくできている。ただ欠点がある。一 父は酒を飲むとなぜ暴力をふるうのか、母は暴力からなぜ逃げないのか、暴力をふるう父から逃げよう！と主人公は母になぜ言わないのか。二 母と主人公が一体で未分離であることをもつと濃く描くべきだ。三 母と決別して新しく愛の絆を見つけるのが小説の主題だが、この主題では小説としての訴える力が弱い。

三 サージカルマスクの向こう側（大学生）

救急医療と手術の現場を実在感と臨場感あふれる描写力で展開している。患者の命を救いたいというひたむきな態度と後輩の若い医師を育てたいという熱意が抑制的に、しかし感動的に表現されている。ただ欠点がある。一 医学用語や患者の状態や医師の行動が専門的すぎて分かりにくい。二 主人公の人生観や思いや過去の体験をもっと強く押し出すとよかった。三 段落がないので読みにくい。

四 片方の盃（高校生）

種々の道具を作って懸命に主題を支えていて好感が持てる。だが作者の世界に読者をじわじわ誘い込む丁寧で辛抱強い描写が必要だ。

五 境目（高校生）

過去と現在、事実と幻想、現在と未来、生きている人と死んでいる人を錯綜させて気味悪がらせる面白い作品だ。その底辺に横たわるもの―例えば存在の不安や不確かさ―を念頭に置いて構成し展開できればいいんだが。

六 く自然界の彼女く（高校生）

超現実主義の青春小説だ。アイディアは面白くて好感が持てる。だが面白さの奥にあるもの―例えば青春の不安、自己嫌悪、焦り、など―を土台にして組み立てる必要がある。

七 東を向けない男（大学生）

模造ピストルの製造が極めて反道徳的で恐ろしい犯罪のように作者は考えているが、そうだと

うか。新聞社への手紙は読者が啓蒙され教示を受けているようで居心地が悪い。

八 夏の華（高校生）

男女の恋心が主題だ。段落を作らずに連続して文を綴っているので読みにくい。発想や視点がおとなしすぎる。もっと過激に！

九 黄昏の街（社会人）

愛・寂しさ・悲しみの感情が浅くて軽いので読者を引きつける力が弱い。生きている悲しみや愛の空しさを深く重く描く必要がある。

十 無（すべて）が嬉しくありますように（社会人）

同じ単語・表現の反復が多くて感動を減殺する。悲惨さや主人公の心情が迫ってこない。

十一 CO2。（高校生）

あまりにも寓話化しすぎて、また道具や象徴を詰め込みすぎて意味がよく伝わらない。

十二 幸せ調停者（高校生）

幸福と不幸が図式的だ。小説は具体的に複合的で混沌としたものだ。それに作者は殺人を安易に軽く考えているような感じを受ける。

十三 悪夢と呼ぶには不可解な（高校生）

具体的に人間関係と出来事を積み重ね、具体的に物語を繰り広げる必要がある。

十四 鬼ヶ島（大学生）

性的少数者や容姿外観に対する差別への抗議を書きたいのだろう。だがあまりにも回りくどい

素材・構成・展開だ。直截に具体的に！

(たまよせ あきら／小説家・文芸評論家)

【小説部門】

『第二回名桜文学賞講評』

あずさ ゆみ

二回目となる名桜文学賞には、喜ばしいことに前回の倍もの応募があった。今回は奨励賞に二作品を選出した。

最初に『傘、舞い散る』について講評する。

まず、本作品には、誤字、脱字がなく読みやすい点を大きく評価した。当たり前のことのように思われるかも知れないが、この当たり前ができていない応募作がほとんどだった。

物語は、放課後の教室に残った「僕」の独白から始まるが、冒頭の、雨の日の教室の陰鬱で幻想的な雰囲気を引き込まれた。風景に加えて音や匂いもしっかりと伝わってくる。クラスメイトの女子との微妙な会話や、関係性も面白い。高校生らしい繊細な心情の描き方にも感心した。帰路の途中で、子供、つづいて車椅子の老人と遭遇するエピソードも好ましかった。

さて、この話をどう着地させるのだろうか？ 期待をこめて読んでいただけに、あの幕引きには首をかしげざるをえなかった。「ちがう」としか言いようのない違和感だけが残った。作者は無

難な終わり方をよしとせず、この結末を選んだのかも知れないが、私には「投げ出した」ように思われた。

次に、『化生』である。

女子大生の蕾が、母と依存し合っている現状に違和感を覚え、そこから脱却してゆく過程を描いている。蕾のナイーブな心情や体感覚を、自分なりの言葉で表現しようと試みており、面白く読んだ。言語化しがたいものを、何とか形にしようと格闘している姿勢を評価したい。ただ、文章の洗練がまだ不十分なのか、読んでいてどうにも歯がゆさを覚えた。母親とのエピソードも弱いように思う。

ラストの桜さんと蕾との関係は唐突に思え、納得できるものではなかった。序盤から少しずつ伏線を張り、ホラー的な不気味さのある流れを形作っていたら、さらに良いものになったのでは？

選には漏れたが、印象に残った作品は『東を向けない男』だ。

3Dプリンタで銃を作った「私」が、己の罪に苦悩し、自首しようとする話だ。

本作は、文章に所々光るところがあり文学性が感じられた。テーマもユニークだ。しかし、全体を俯瞰すると、どうにも散漫な印象を覚えた。「私」がなぜこんなにも動揺したり焦ったりしているのか、頭では理解できても共感を覚えなかった。ゆえにラストに至るまでの葛藤と決意とが、感動に結びつかなかった。

今回は高校生の応募が半数近くあり、若い書き手が増えていることに期待したい。中でもファンタジーの要素を持つ作品が多かった。「こんな世界が好きなんだ！」という、ほとぼしるパッションが伝わってきたが、できるなら、読者の存在をもう少し意識しながら文章を紡いでほしい。

ライト・ノベル調のポップな作品も見られたが、ラノベの肝となる「会話」「キャラクター」が弱いように感じられた。

明らかに語彙の使い方を間違っている文章もあった。少しでも疑問を覚えたら調べる癖をつけよう。

そして、書いたら必ず推敲してほしい！

推敲は面倒くさい。しかし、いかに自分の中の面倒くさいと向き合い、粘り強く取り組むかによって、小説の完成度は大きく変わってゆくのだ。

(あずさ ゆみ／作家)

【詩部門】

詩部門選考について

西原 裕美

今回は詩部門に六十六作品の応募があつた。学校単位で送られてきたものがあつたため、昨年よりも非常に多い作品数であつた。

最優秀賞の「陽炎の意志」は、満場一致で選ばれた。作品から溢れ出す圧倒的な存在感と詩の構成力、色々とやりきれなさを抱えながらも、生き続けてきた沖縄県民の力強さを思わせる作品であつた。全ての選考委員がこの作品を最終選考の候補として挙げていたほどに完成度の高い作品であつたと言えよう。

奨励賞の「真夜中のブルーライト、冷めた空白」は、若者がSNSを通じて繋がることができ、現代社会の中で、沢山の人と繋がることのできるにも関わらず、孤独を感じてしまっている矛盾が上手く表現されていた。しかし、前半の表現については賛否があるところだと思われる。

「寝台あるいは墓地」は、やや難解な作品ではあるが、一つ一つの表現が面白いと感じた。「心臓から漏れ出した苦みが／時代から溢れ出した光が／目蓋を閉じても届く明かりが／そのハコの中で半端に混ざるから」など丁寧な表現が、読者を思わず立ち止まらせ、この作品のメッセージを探してみようと思わせる作品である。

「スプリント」は、短距離走のようにがむしゃらな必死さで生きようとしているエネルギーを感じさせる。また、ダサくてカッコ悪い自分自身を時間に戻したいという気持ちを「Ctrl+N」で表現しているユニークさなど目を惹かれるものがあつた。

「いまのまに」は、漢詩調で綴られており、命が終わりに向かって今この時の心象や情景を独特の表現で描いている作品であつた。この漢詩調の中に「いまのまに」という言葉が良いアクセントとして用いられているところを評価したい。

「ありのまま」は、「まるで、素直さと優しさに色を付けて／透明なガラスの中で混ぜたような／その涙で」という表現が素敵であつた。綺麗や汚いなどの安直な言葉を用いるのではなく、自分なりの言葉で唯一無二の表現を生み出していることが素敵であつた。

他にも最終選考の候補作として、「ジュゴンの嘆き」、「初稿と決定稿 あるいは（訂正印の効

用)、「父子の対話、某大病院待合室にて」があつた。

全体としては、個性的な表現をする作品は多いものの、その表現が作品のためになつてゐるのか、伝えたいことを邪魔していかを十分に検討するべきではないかと感じた。また、現代的な表現も多い一方で、そのせいで、この先何年も読み継がれていく作品にはなり得ない可能性もあることを考えた上で表現しているのかどうか疑問に感じられた。

しかしながら、若い世代が様々な表現方法を模索しながら作つてくれた作品を多数読むことができたことは非常に楽しく、自分にとつても今後詩作をする上での刺激にもなつた。また、最優秀賞を受賞された方のような実力を感じさせる詩を名桜文学賞で発掘できたことは非常に嬉しい限りであるし、今後も書き続けていつて欲しい。

(にしはら ゆみ／詩人)

【エッセイ部門・詩部門・短歌部門】

第二回名桜文学賞の選評

吉川 安一

第二回名桜文学の審査を終えて思うことは、年次的に、名桜文学への応募の輪が地域社会や高等学校・専門学校並びに高等教育機関の大学に広がりつつあると共に内容の深まりを実感している。更には、応募者の文字言語を通して、表現者の思想心情を読み味わうと共に多くのことを考えさせられる作品の多いことに感服する。

筆者は今回も審査委員として、【エッセイ部門・詩部門・短歌部門】を担当した。作品の審査にあつては、各作品の道に専門で造詣の深い審査委員が審査をしているので、その結果は、最高レベルの結果だと確信している。

審査の方法は、各ジャンルの作品を各審査委員が、各作品一覧表から上位の一位・二位・三位の番号を出し合うとともに、その作品についての内容や順位の根拠になった理由等を出し合い、各審査委員長が上位の結果をまとめた。どのジャンルの作品の上位の作品番号は、不思議なことにはば一致していた。申し上げるまでもなく、ある作品部門では作品の審議を深め上位を決定した作品もあった。

筆者は、審査に当たっては、次の審査項目を1、題名の設定。2、主題。3、言語表現。4、誤字脱字。5、文末表現。6、短歌部門では形式《五、七、五、七、七》「三十一文字」7、社会事象、人事、自然現象の題材等。8、応募規定。9、感銘、共感度等を勘案して審査に臨んだ。

審査結果の作品の中から詩・エッセイ・短歌部門の作品について、極簡結に選評する。エッセイ部門のタイトル「おきあがりこぼし」は、主人公の父が、第二次大戦に参戦。戦争で負傷して帰国後、教壇に立ち社会生活の中で家族愛に支えられて、「おきあがりこぼし」の生き方を続ける。人の一生や生き方を考えさせられる名エッセイである。多くの方に一読を薦めたい。タイトル「東村の色」の作品について、今日まで各市町村の色彩について考えたこともないので興味が湧いた。その色彩は、子孫が東村の旧家を訪ねた折、尊い亡き祖父の厚い愛情の籠った優しい淡い金色であった。蝶の色は、先祖が子孫を大切に作る淡い黄金色であると言伝えられていて、東村の色彩がそれに象徴されていた。その他の作品も読み応えがある作品ばかりで読み味わうことができた。

詩部門の作品の応募数は六十六点。名桜文学の募集成果が、高等学校の国語科教育の学習指導の発展として生徒たちの言語表現力を育成するために意図的に教壇実践を試みておられる授業風景を思い起こし感謝の念で、作品を読み味わい深めた。

詩部門の作品番号、1「陽炎の意志」と2「ジュゴンの嘆き」の作品は、米軍基地に対する沖縄の過去や現実の社会事象や人事及び自然環境を如実に表現した作品で多くの人々に達読をお薦めしたい。《達読とは、筆者の考えに対し読者が自分自身の考えを持つ読書行為。》

短歌部門の作品でも作者の心象風景を読み味わうことが出来た。五、七、五、七、七の三十一文字

に作者の思想心情を表現することは、自然界や人間社会や自分自身の生き方を深く見つめなければならぬ。

未来において内容充実した豊かな名桜文学の集大成を試みる時、当初からのコンクールの総ての応募作品を保管整理すべきだと審査を終えて思った。

(よしかわ やすいち／名桜大学名誉教授)

【短歌部門】

短歌部門の評

屋良 健一郎

「第二回名桜文学賞」詩・短歌・俳句の三部門の選考会は令和三年（二〇二一）十二月十日に沖繩産業支援センターの会議室で行った。俳句部門は、おおしろ建氏、西原裕美氏、屋良の三名で、詩部門と短歌部門は、これに吉川安一氏を加えた四名で選考した。

今年度は、詩部門六十六編、短歌部門十一編、俳句部門七編の応募があった。ちなみに昨年度は詩が十五編、短歌が二十一編、俳句が二十四編。短歌と俳句の減少は寂しいものの、詩の応募が大幅に増加（学校単位での応募もあったため）したのは嬉しいことだ。

選考委員は作品にあらかじめ目を通し、自分が良いと思った作品を三編程度選び、当日の選考会に臨む。選考会では複数の選考委員から推薦のあった作品を中心に議論が行われ、最優秀賞と奨励賞が決められる。詩部門・俳句部門については他の選考委員の講評をご覧いただくこととし、ここでは私が専門とする短歌について述べる。

名歌集豊かな言の葉さやく森フィットンチッドを繰るたびに浴ぶ

遠景に海岸道路走らせて九月の風は滑らかに吹く

最優秀賞となった「ジョバンニ」から二首を引いた。一首目は「名歌集」を「豊かな言の葉さやぐ森」と表現する。歌集に収録された短歌（三百首から四百首くらいが一般的）の一首一首が木であり、その総体である歌集を森と捉える。「フィトンチッド」は樹木が出す揮発性物質で、森林浴でこの物質を浴びることによってリラックス効果があるという。下句は「名歌集の頁を繰るたびにフィトンチッドを浴びる」の意。語順としては「繰るたびフィトンチッドを浴びる」のほうが分かりやすい。しかし、「フィトンチッドを繰るたびに浴ぶ」としたことで「フィトンチッド」を「繰る」という錯覚が生まれる（実際には「繰る」のは「名歌集」の頁）。このことが一首の意味を取りづらくしている。こういった語順は一首にとつて傷になることもあるが、この歌の場合は成功しているように思う。言葉と言葉のつながりの緊張感、読み取れた時の達成感を読者に抱かせる一首になっているのか。

二首目はいかにも短歌らしい短歌で、作者の堅実な力を感じさせる。「遠景に」という詠い出して遠くへ視線を飛ばす風景の立ち上げ方も良いし、「滑らか」という言葉選びも、すべすべした、すべるように吹く風の軽やかさを感じさせ、爽やかな一首となった。

連作の最後の五首目は説明的な歌となっていて、あまり良い歌ではないと思う。しかし、五首を通して見ると、全体的には作者の力を感じさせる連作となっており、選考委員から高い評価を得た。

奨励賞には評価の高かった順に「シン・ママ」「岸を境に」「蟲毒」「庭に水景物のあるレストラン」「傘寿の友へ」が選ばれた。

「シン・ママ」の「シン」は「シン・ゴジラ」など、映画監督の庵野秀明氏の作品タイトルを踏まえたものだろう。自分の視点で「ママ」像を描き直すという意味が込められていると読んだ。一首目「半分はあなたで出来た生き物が私を母に育てています」について、子供が母親を育てると詠む下句が好評だった。子供を「生き物」と表現する客観的な詠みぶりに、逆に子供への愛情が感じられる。四首目「なんで？つて飽きることなく訊きみの小さな手には宇宙のしっぽ」が特に心に残った。子供の質問はシンプルながらも核心をついてくる。そのような質問を繰り返して世界を認識していく子供の様子を個性的な表現で詠む。子供を詠むと直接的すぎる表現や甘い詠みぶりになってしまいがちだ。しかし、「シン・ママ」では「生き物」「へその緒」という言葉を的確に使うことで対象（子供）との距離を保ちつつ、「未来の音」「宇宙のしっぽ」といったフレーズで詩的に仕上げている。子供を詠んだ連作としては高い水準のものだと思う。一首目から四首目までの歌が良いだけに、一連を締めくくる五首目が甘く、やや粗いように感じられた。

「岸を境に」の二首目、飛行機が月に重なることで、月光がさえぎられて地上の人が点滅する、という発想が幻想的。三首目は友達と海にいて、写真を撮ったりしている場面か。「裸足の跡が交差して」が上手い。直接に人を描くのではなく、足跡で人の存在、にぎやかさを感じさせるところに詩がある。青春性のある一首。この二つの歌に比べると、他の三首は可もなく不可もない作に思えた。

「蝨毒」は良い歌と悪い歌の差があるとの指摘が選考会で出た。二首目「溶け落ちる見知らぬ窓辺かげろうの硝子の川で蛾は溺死する」などは、「見知らぬ」がやや雑な表現という感じもするが、作者の美へのこだわりが感じられる作である。三首目は屋外での性愛の場面もイメージさせる妖艶な歌。初句・二句は良いと思うが、下句でやや俗っぽい感じになってしまったか。四首目「いない子の影を送れば光る貝せわしなく蝦淀みへ向かう」は寂しさや喪失感を感じさせる上句が上手いが、下句が「せわしな」い場面を詠んだことでややごちゃごちゃした一首となった感じがする。全体を通して、作者の悪や美への志向は良いし、上手いと思う表現・フレーズもあるが、一首となった時に粗さが見えてしまうように思った。

「庭に水景物のあるレストラン」はタイトルが良い。中身はなかなかの問題作である。一首目はお店の看板に記された文字だろう。見た目としては営業時間を記しただけなのだが、「おーぷんじゅ／うにじはんから／じゅうななじ／らすとおーだー／じゅうろくじはん」と三十一音になっっている。四首目はメニュー表に記された料理名（または運ばれてきた料理の見た目）をそのまま詠んだもので、これも「やんばると／んかたろーすの／ばるさみこ／とまとあか／わいののにこみ」と三十一音。句の切れ目と言葉の切れ目が合わない「句跨り」という技法くまたがを用いながら三十一音に収めている。他の歌も同様だ。一見、定型を無視した自由律のようでありながら、三十一音を守っている意外性に驚く。営業時間や料理名といったなんでもないものを短歌にしたことに、定型というものの力を試す挑戦の意図があるのか、あるいは逆に定型への不信感があるのか分からない。だが、こういった詠みぶりと、人間の息づかいを感じさせない五首すべての場

面の切り取り方は、人間が存在しない世界の静寂を想像させて、印象深い一連となっている。意外性や連作としての試みは高く評価したが、五首それぞれを独立した一首の歌として見た場合の完成度はそこまで高くはないように思う。しかし、こういったスリリングな作品が「名桜文学賞」に出てきたことに、選考委員として喜びと緊張感を感じる。

「傘寿の友へ」は、一首目の上句「ペン先に小さな秋をひそませて」が高い評価を得た。連作の一首目・三首目・四首目はそれなりの完成度となっているが、新型コロナウイルスを詠んだ二首目と五首目は説明的になった点が惜しまれる。時事的な問題を詠むことの難しさが感じられる。

他にもマツチングアプリを題材としたと思われる「ネオ仮面舞踏会のすすめ」について、現代の世相が表れているとして評価する声があった。

昨年度と比べると応募数が減った短歌部門ではあるが、応募作の質は高いということが選考会で話された。昨年度は該当作なしであった最優秀賞を出すことができ、また奨励賞として五作品を選んだ。十一編の応募で半数以上の六編が入賞するというのは甘い結果と思われるかもしれないが、今回のレベルの高さを示すものだと、選考委員としては考えている。応募数は少ないながらも堅実な作品から実験作まで、多彩な作風に出会うことができたのは嬉しい。応募してくださった方々が、どのような作品を詠んでいくのか、今後を楽しみにしています。

(やら けんいちろう／名桜大学国際学群上級准教授)

【俳句部門】

第二回名桜文学賞・俳句部門選評

おおしろ 建

俳句の募集は今回で三回目である。俳句部門の応募はわずか七作品だけであった。前回の第一回名桜文学賞は二四作品の応募があり、俳句部門の認知が広がってきたと期待しただけに、残念であった。詩の応募が六十六編もあったのでよけいに寂しく感じた。ただ、高校生の応募があったことは、嬉しい傾向である。これからもどんどん応募して欲しい。

俳句部門は五句で一作品の募集。五句をまとめたタイトルをつけることになっている。選考は作品の五句があるレベル以上で揃っているか。新しい発想の俳句があるか。また、作品の深み広がりがあるか、などが問われた。氏名は伏せての審査会であった。

今回、最優秀賞は見送りになった。五句が揃うことは難しいことである。

奨励賞「小鳥来る」本村隆信（もとむら たかのぶ）

（沖繩忌円周率の桁のほど）。「沖繩忌」と「円周率」との取り合わせに火花を感じた。六月二三日の「沖繩慰霊の日」は、沖繩戦などの戦没者を追悼する日として定められている。「円周

率の桁のほど」で「沖繩忌」での追悼の痛みが無限大にあることを表現しているのだろう。悲しみの輪が無限に広がる感じだ。

〈潮時の婚の知らせや小鳥来る〉。「潮時の婚の知らせ」に親族縁者の喜びの声が聞こえて来るようだ。待ちに待ってた知らせ、ちょうどよい時期で季節もいい。上げ潮に乗って来るような知らせ。秋の渡り鳥も北の方から祝福の声をあげて飛んで来る。

〈小春日やシーサーの顔みな快し〉。冬の寒さに向かう中で、ひととき暖かな日を、春のようだということで「小春日」と呼ぶ。屋根のシーサーたちも、今日は暖かいねと顔を見合わせほころんでいるようだ。

奨励賞「男子の目」外田さし（ほかだ さし）

男子の視線、もしくは男だったらこんな風であろうと意識した作品の五句。

〈夏河の尻のあたりで丸くなり〉。夏の日に河に入ったのである。すると河の流れが尻の方で丸く渦をまいたようになった。それを「夏河」と擬人化したのが楽しい。夏河の奴がオイラの尻のあたりで丸くなってしまったんだ、とでも言っているようだ。

〈膝をつくときの地球の固さかな〉。罰されて、地面にひざまずいたのだろうか。直接、地面に膝が触れたときの感触を「地球の固さ」と表現。地球を意識したのがよい。

〈昨日より港のほうに蝸牛かたつむり〉。何だろうと思わせる奇妙な作品。歩みののろい蝸牛は移動が遅い。あいつ昨日よりまだ港に居るみたいよ、とでも喋りあっているのか。

奨励賞「十七歳 夏俳句」福井聖來（ふくい せいらい）

高校生の俳句。発想が新鮮である。分がち書きしているが、必然性を感じない。

〈金網を 越えて飛び込む 夏の空〉。校庭の周りの金網か。金網を越えて飛び込んだのは作者であろう。飛び込んだのが「夏の空」と擬人化したのがよい。金網を跳びこえた先で見上げると夏の真つ青な空が広がっている。

〈アイス食べ 入道雲に 監視され〉。アイスを食べているのを入道雲に監視されていると発想したのが楽しい。親にアイスばかり食べて、と言われているのか。

〈網とかこ 夏の足音 追いかけて〉。虫取りの網と虫籠を持つて駆け出す姿がよく見える。「夏の足音」の表現がよい。それをまた「追いかけて」としたのもよい。過ぎゆく夏を惜しみながらも夏の背中を追いかけているようにも思える。

（おおしろ けん／俳人）

【エッセイ部門】

第二回名桜文学賞エッセイ部門 選評

小番 達

前回の第一回名桜文学賞エッセイ部門への応募が六編ということで少し寂しく思っていたが、今回は倍の十二編の作品が寄せられた。まずは応募してくださった方々にお礼を申し上げたい。

さて、最優秀賞を受賞した「おきあがりこぼし」は、戦争で負傷した父親の人生を追想する作品である。教員をしていた父親の教え子がその訃報に接して地方紙に投稿した文章が作品冒頭に置かれ、続いて十三回忌という節目を迎えたことをきっかけとして、父親の人生を時系列的に辿り、書き手や母親の思いも織り交ぜながら展開してゆくという構成がよかった。文章も落ち着いた、丁寧な筆の運びで応募作の中で最も安定感があった。また、タイトルになっている「おきあがりこぼし」という語は、負傷した父親に向けられた差別的な意味を表すものであったが、困難に出遭うたびにそれを乗り越えて起き上がる父親を象徴するキーワードとして捉え直している点が秀逸だった。ただ、結びの部分に物足りなさを感じた。紙幅の関係もあったのかもしれないが、「おきあがりこぼし」である父親に対する書き手の思いを書き込んでもよかったのではないかと思った。

次に奨励賞受賞作の「演奏会と音楽葬」である。還暦を迎える妹を交えての家族演奏会を計画するも、その妹が病いで突如帰らぬ人となってしまう。妹の葬儀は彼女の音楽仲間が集まったの音楽葬となり、家族演奏会で扱はずだったビートルズの「アンド・アイ・ラヴ・ハー」が図らずも最後の曲として演奏される。以上が粗筋である。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」という曲名からこの曲に妹への思いが込められていることは容易に理解できるが、一方は妹の還暦を祝うための曲、他方では亡き妹を見送るための曲という相反する状況、目的になっているところにこの作品の妙味がある。その分、音楽葬に参列した折の書き手の心の裡をもっとしっかりと描き出す必要があると思う。また、短い文で綴られる文章は読みやすいのだが、係り受けが不自然な箇所や説明不足の箇所が多く見受けられた。今後、文章力により磨きをかけてもらいたい。

続いては奨励賞の二作品目「一日三食」である。この作品は、幼少期の「へびいちご」にまつわる話、厳冬の北海道で食べたアイスの話、大学進学で出会った沖縄の野菜や果物に関わる話から構成され、三話ともそれぞれの内容と現在の自分との関係が話末評語的に語られるというかたちになっている。文章は、若者らしい、コミカルな筆致で非常にわかりやすく、好印象であった。内容については、前の二話に比べて三話目が平板なものとなっていること、また、三話それぞれが独立した内容になっていることが気になった。複数の話柄から成る構成であったとしても、一つのテーマが設定され、それぞれの話柄がそのテーマに収斂する、あるいは連関するような内容であることが求められる。タイトルの「一日三食」の「一日」の意味がわかりにくいこともテーマの設定の仕方に起因するのではないかと考える。この点、ぜひ一考してもらいたい。

最後になるが、受賞された方々には心より讃辞を送りたい。今後もぜひ書き続け、よりよい作品を創り出していただきたい。また、惜しくも選外となった方々も更に研鑽を積まれ、本文学賞に応募していただきたい。次回も多くの作品に出会えることを楽しみにしている。

(こつがい とおる／名桜大学国際学群教授)

【琉歌部門】

第二回 名桜文学賞琉歌部門講評

波照間 永吉

今年の琉歌部門への応募数は全部で11首。その内訳は「沖繩の城址に因んで・・・」と題したAさんの5首と6人の方の各1首ずつ、というものであった。一つのコンクールの応募作品数としては寂しい数字である。

その応募数の少なさはさておくとして、もつと残念なのは、ほとんどの作品が8・8・8・6音という琉歌の基本をなす音数律が守られていないことである。Aさんの作品2首を除くと、他は琉歌になっていない作品であった。8音であるべきところが7音であったり、9音であったり、はては11音であったりしているのである。これがあえて破調をねらったものでないことは作品を一目見れば明らかであるから、今回の応募作品のほとんどが、歌の出来不出来を吟味する以前に、問題を抱えた作品であったことがおわかりいただけたと思う。

また、琉歌の8音・6音のその内部は、5+3音、3+5音、3+3音を基調とすることも押さえておいて欲しいことである。音数が8音や6音に合致していてもその内部の構成が上記の形にならないと、琉歌の調子としては不自然になる。そのような基本を大切にしたいのである。

もちろん、破調など、意識的に上記の範疇をこわして内容にふさわしい調子を出す技法はある。しかし、基本はあくまでも8・8・8・8・6音にある。まずはその基本に忠実に詠んで欲しいと思う。それと、琉歌はしまくとうばで詠む、という基本がある。そのためにはしまくとうばの勉強もまた必要である。Aさん以外の応募者の作品にはその基本からはずれたものが多かった。琉歌のしまくとうばや表現は、数多くの琉歌作品を読んだり聴いたりすることによってしか学べない。読書によるほか、ラジオやCD、あるいはコンサートなどで民謡を聴くなど、自分にあつた方法で学んで欲しいと思う。けっして楽なことではないが、耳目を通して多くのしまくとうばの表現にふれることによって、琉歌上達への道を進んで欲しい。

辛口の選評となったが、意のあるところをお酌み取りいただきたい。

(はてるま えいきち／名桜大学博士課程研究科長)

【琉歌部門】

名桜大学二〇二一琉歌コンクール 選評

照屋 理

昨年から沖縄県内各地でコロナが猖獗をきわめる中、今年度も関係者の尽力のおかげで名桜琉歌コンクールの公募が実現された。応募数自体は前年度を下回ってはいたが、次年度ぜひ更なる応募を期待したい。

さて、応募作品についてであるが、琉球語・方言話者の方によると見受けられる作品と、話者ではない方からの応募と見受けられる作品に分けられた。

まず全体的なことに触れると、琉歌を詠む際のルールが守られていない作品がほとんどであった。琉歌には基本的に、八音＋八音＋八音＋十六音といれつきとした音数律が存在する。この八六調とも称される音数律は、例えば本土の五音＋七音＋五音の音数律でつづられる俳句や、五音＋七音＋五音＋七音＋七音でつづられる短歌などの五七調と比し、独特の語調をもたらし、琉歌を特徴づけている。さらにその八六調に本土の五七調の歌詞を入れることによって、仲風と称される、比較的ゆったりとした琉歌の中に緊張感を含ませる作品を生むことも可能である。今回の応募作品には、いずれのルールも無視した作品が複数あった。ひとまず、和歌が五七調を基本

とするように、琉歌は八六調が基本であるという点を知っておいてほしいと思う。

次に一句内ずつの歌詞の区切り方（文節的区切り）に触れたい。琉歌の基本形は八音十八音十八音十六音で、全部で四つの句から成り立っている（なお、八音がさらに続く形式もある）。それぞれ一つの句の歌詞について、好きなように文節的区切りを設けていいわけではない。八音の場合には三音十五音、もしくは五音十三音で区切り、六音の場合には三音十三音で区切る（文節を設ける）というルールがある。巷間よく知られている伝統的な琉歌作品はほとんどこのルールに従って詠まれている。例えば「ていんさぐぬ花」の歌詞をとりあげてみよう。

てんしやこの花や 爪先に染めて 親の寄せ言や 肝に染めれ

「ていんさぐぬ花」は分かり易く文節で区切ることが可能であるが、「てんしやこの」（五音）＋「花や」（三音）、「爪先に」（五音）＋「染めて」（三音）、「親の」（三音）＋「寄せ言や」（五音）、「肝に」（三音）＋「染めれ」（三音）と、上記ルールに則ってつづられていることが明らかである。

八音十八音十八音十六音というルール、文節的区切りのルールはそう複雑なものではないので、これから琉歌を詠み続けていく中でぜひ意識しながら活用してみてほしい。

また、伝統的な琉歌作品をたくさん読み、味わうことをお勧めしたい。今回の応募作品は、テーマとしてグスク、恋愛、病（コロナ）などがあった。これらのテーマは昔から共通して琉歌に歌われてきたものである。時代の波に洗われながらも、今に歌い継がれた先人たちの琉歌に数多く

触れることで、かつて琉球語を自在に操り、さまざまな想いを琉歌に綴った先人たちの息遣いや、残してくれた遺産の素晴らしさが実感されることと思う。

先達の琉歌を鑑賞することを通して琉歌のルールは意識しなくとも自然に培われていくはずである。今回の応募者の更なる精進と次回以降の応募を心より期待している。

(てるや まこと／名桜大学国際学群上級准教授)

第2回(令和3年度)

名桜文学賞



作品募集

募集期間 令和3年9月6日(月)～10月8日(金)【必着】

応募要領

①「小説部門」

- 400字詰め原稿用紙で、50枚程度(原稿紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること)。ワープロ原稿は、1行30字×40行を目安にA4用紙のウチ幅の1/2幅に収める。応募は1人1作品とする。
- 表紙に部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を記入し、および400字詰め原稿紙数を明記する。
- 表紙の裏面にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 表紙に必ず〒印し番号(バーコード)を入れて、右扉を綴じる。

③「短歌部門」

- 原歌25首での応募とし、400字詰め原稿紙1枚に15首を記す(縦書き)。ワープロ原稿は、字数一行幅の目安は原歌と同等に1行15首を記すこととし、応募は1人1稿(5行)とする。
- 表紙に部門名、5首をのちよみとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 表紙の裏面にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

⑤「俳句部門」

- 原句25句での応募とし、400字詰め原稿紙1枚に15句を記す(縦書き)。ワープロ原稿は、字数一行幅の目安は原歌と同等に1行15句を記すこととし、応募は1人1稿(5行)とする。
- 表紙に部門名、5句をのちよみとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 表紙の裏面にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

②「詩部門」

- 400字詰め原稿紙で3枚以内(縦書き)。ワープロ原稿は、1行20字×20行のマス目を表示したA4用紙の幅に収める。応募は1人1稿とする。
- 表紙に部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 表紙の裏面にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 表紙に必ず〒印し番号(バーコード)を入れて、右扉を綴じる。

④「エッセイ部門」

- 400字詰め原稿紙25～30枚程度(原稿紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること)。ワープロ原稿は、1行30字×40行を目安にA4用紙のウチ幅の1/2幅に収める。応募は1人1作品とする。
- 表紙に部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を記入し、および400字詰め原稿紙数を明記する。
- 表紙の裏面にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 表紙に必ず〒印し番号(バーコード)を入れて、右扉を綴じる。

⑥「琉歌部門」

- 原歌は5首以内(1首から5首)での応募とし、400字詰め原稿紙1枚に記す(縦書き)。ワープロ原稿は、字数一行幅の目安は原歌と同等に1行1首を記すこととし、応募は1人1稿(5行)とする。
- 表紙に部門名、5首をのちよみとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 表紙の裏面にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 表紙に必ず〒印し番号(バーコード)を入れて、右扉を綴じる。

賞および賞金

- ①小説部門 最優秀賞(賞金10万円)1名
- ②詩部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ③短歌部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ④エッセイ部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ⑤俳句部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ⑥琉歌部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ⑦上記部門 奨励賞(記念品)若干名
- ※落選者には賞金振込額の領受カードをします。

応募資格

- ①沖縄県内在学者(高校・高等・短大・大学・専門学校)
- ②沖縄県内在住社会人

応募条件

- ①応募作品は本賞会の作品
- (新聞・雑誌・個人誌やホームページ・ブログ、SNSなどで発表していない作品)に限ります。
- ②同時に3つ以上の部門への応募はできません。

表彰式

令和4年2月中旬予定

注 記
●応募資格についての場合には、一切ありません。
※応募資格に該当しない場合は、審査員には応募できません。
●応募後、作品の修正や変更はできません。
※落選している場合は、お問い合わせください。
●賞状賞品に関して、図書館の発行時に限り(図書館HPへの掲載を後)、受賞者からの美術館の許可確認を必ずご依頼することができるとします。

応募要領



作品送付先および問い合わせ先

名桜大学附属図書館 名桜文学賞作品係

〒905-8585 沖縄県名護市字又良1220-1 電話:0980-51-1062 名桜大学HP: <https://www.meio.ac.jp/>



編集後記

第二回名桜文学賞編集に当り県内高校等関係各位にご協力を賜り、多数の応募を頂戴し感謝いたします。また応募された皆様にも感謝申し上げます。

また、コロナ禍の影響により、昨年度に引き続き受賞式を断念することになったことにつきましては残念でなりません。次年度はコロナが終息し授賞式が開催できるよう皆様と共に祈念いたします。

名桜大学の文化事業の一環として、名桜文学賞を沖縄県内在学者（高校・高専・短大、大学、専門学校）、沖縄県内在住社会人を対象に実施しています。併せて、名桜文学賞受賞作品集も刊行しております。これまで、受賞作品の紹介は冊子のみでしたが、多くの方々へ受賞作品に触れていただくこと、同事

業の成果を広く紹介するため、当館のホームページに受賞作品集を掲載することになりました。ご期待ください。

第二回名桜文学賞受賞作品集

(名桜大学附属図書館報 特別号 令和三年度)

発行日

令和四年三月三十一日

編集 名桜大学附属図書館

発行 公立大学法人名桜大学

〒九〇五-1858

沖縄県名護市字為又一二二〇-1

印刷

株式会社 国際印刷

名桜大学附属図書館報 特別号 令和3年度

